女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百六拾五號

當府内無郵税

一册六錢

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

雜　　　　女

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 165. June 8th, 1889.

EDITORIALS:—Morality Universal.

LEADING ARTICLES:—Improvement of Food.

CRITICAL NOTES:—Woman's Colleges in America.

MISCELLANEOUS:—"Men of Principle." "Devotion and Separation." "A Request to Husbands." "What Bakin's Novels have Done." "Ears of Wheat." "Love of God."

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES:—"Saigiyo." "Mrs. Matsumoto."

NOVELS.

GENERAL NEWS.

第百六十五號目錄

社說　到る所に道あり

論說　食物改良論(津田仙、巖本善治)

批評　米國女子大學規則を評す

雜錄　主義の人○深き愛と別離○吾良人に請ふ○馬琴小說の効果○麥の穗○神の愛○兼好法師の寃を雪ぐ○玉堂随筆○茶話三

兒籃　乙女亞利斯(波月子)

史傳　西行法師(しのぶ)○松本いさ子(星野光多)

小說　あるのん物語(美妙齋)○酒鬼(藕花主人)

開書　O. P. C. 君に答ふ(佐々城豐壽)

時事　婦人矯風會々頭○女學雜誌は改良せず○高等女學校擇む所ろの婿○法師婚禮の仲人たり○佛海益す賑やかなり○高僧の蓄妾○泉源既に濁る焉ぞ下流の清きを望まん○新平民○自然崇拜者の答○女性の市長市參事員

片々　吳くみ夫人○外三件

外報　英國婦人禁酒會○婦人の被撰權

BIRTHPLACES OF NOTED WOMEN.

Frances E. Willard, Churchville. N. Y., Sep. 28, 1839.
Louisa M. Alcott, Germantown, Pa., Nov. 29, 1832.
Mrs. Jane Austin (Goodwin), Boston, Feb. 25, 1831.
Charlotte Fiske Bates, New York City, Nov. 30, 1838.
Rosa Bonheur, Paris (probably), 1822.
Elizabeth Barrett Browning, 1809.
Mrs. Mary E. Blake, Dungarven, Ireland, Sept. 1, 1840.
Helen Gray Cone, New York City, March 8, 1859.
Mrs. Dinah Maria Craik (Muloch), Stoke-upon-Trent, England, 1826.
Alice Cary, Mount Healthy, Ohio, April, 1820.
Phoebe Cary, Mount Healthy, Ohio, 1824.
Lydia Maria Child, Medford, Mass., Feb. 11, 1802.
Rose Terry Cooke, Hartford, Conn., Feb. 17, 1827.
Baroness Burdett-Coutts—Angela Georgiana Burdett—1814.
Mrs. Mary Mapes Dodge, New York City, 1838.
Mrs. Julia C. Dorr, Charleston, S. C., Feb. 13, 1825.
Anna E. Dickinson, Philadelphia, Pa., Oct. 28, 1842.
George Eliot—Mary Ann Evans—Arbury Farm, Warwickshire, Eng., Nov. 22, 1819.
Elaine Goodale, Mt. Washington, Mass., Oct. 6, 1863.
Dora Read Goodale, South Egremont, Mass., Oct. 26, 1866.
Mrs. Felicia Dorothea Hemans, Liverpool, Eng., Sept. 25, 1793.
Emily Henrietta Hickey, Enniscorthy, Ireland, April 12, 1845.
Mrs. Louisa P. Hopkins, Newburyport, Mass., April 29, 1824.
Mrs. Julia Ward Howe, New York City, May 27, 1819.
Mrs. Mary Clemmer Ames Hudson, Utica, N. Y., 1839.
Frances Ridley Havergal, Astley, Worcestershire, Eng., Dec. 14, 1836.
Gail Hamilton,—Abigail Dodge,—Hamilton, Mass.
Harriet G. Hosmer, Watertown, Mass., Oct. 9, 1830.
Jean Ingelow, Boston, Eng., 1830.
Helen Hunt Jackson, Amherst, Mass., Oct., 18, 1831.
Mary Lyon, Buckland, Mass., Feb. 28, 1797.
Mrs. Catherine Christina Liddel, Narsick, India, Feb. 14, 1848.
Maria White Lowell, Watertown, Mass., 1821.
Lucy Larcom, Beverly Farms, Mass., 1826.
Mary A. Livermore, Boston.
Harret Martineau, Norwich, Eng., June 12, 1802.
Mrs. Louise Chandler Moulton, Pomfret, Conn., April 10, 1835.
Maria Mitchell, Nantucket, Mass., 1818.
Lucretia Mott, Nantucket, Mass., Jan. 3, 1793.
Florence Nightingale, Florence, Italy, 1820.
Margaret Fuller Ossoli, Cambridgeport, Mass., May 23, 1810.
Elizabeth Stuart Phelps-Ward, Andover, Mass., Aug. 31, 1844.

讀　　　　學

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

西行法師肖像

こゝろなき身にも哀れは知られけり
鴫たつさわの秋のゆふぐれ

なげけとて月やは物を思はする
かこちがほなるわが涙かな

鴫立澤西行菴

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百六十五號 明治二十二年六月八日發兌

社說

○到る所ろに道あり、

一 道一つ云く仁のみ。

一草一木の繁茂する必らず其理あり。人間の生々するに於て安くんぞ其道あらざらんや、彼の雀を見よ、其の二羽を十錢にて買るに非ずや、然れども天の許しなくんば暴りに落るとなし、房々たる千万の汝ぢが髮亦た數へらる、敢て徒らに枯るゝとなし、之を如何んぞ動植の王萬物の靈に於て之が一居一動に道とすべき所ろあらざるの理あらん哉。

果して道あり、而して人間の人間たるは其衣食するが爲にあらず、猿も毛を裝ほひ且つ能く食ふにあらずや、亦其の人間たるは利害を辨ずるが爲にあらず、犬も棒を避け猫も木天蓼に近づくにあらずや、果して然らば人間の人間たる所ろ抑そも何如ん、思ふに能く其の善惡を辨じ、正否を斷じ、義に就き不義を惡むの良心あるが爲めにあらずや。 然らば則はち人間の一去一動必らずや道あり、而して其の人間たるの道ある處ろ亦た必らずや善惡の則あり。

既に善惡の則あるところ、吾人は善の必らずや榮え、惡の必らずや衰ふるを信ず、吾人は謹んで之を吾等が意識に問ふに善の到底勝つべきとを自覺せり、更らに之を經驗に尋ぬるに惡の必らず敗るべきとを認知せり、亦更らに之を傳紀歷史に考ふるに、義者は必らず永賞を受け、惡者は必らず永罰を蒙るとを確識したり。 故に人間の居動する所ろ千差万別なりと云へども、其事業の必らず成り必らず盛ゆるものは亦必らずや善道に適ものならざる可らず、之を以て人世の最も大ひなる事業は必らず尤も正しきに伴ふ、正しきの心なき所ろ斷じて遠大の事業あるなし。

俗人或は云く、彼は某々の職にあるが故に其道德高からざる可らず、此は云々の職にあるが故に未だ酷はだしく責むべからずと、蓋し職業の相違によりて道德の責任を相違すと云ふ也。嗚呼俗論の道を誤まると非常にあらずや、抑そも人間にして禽獸の事を爲とせば亦之を問はず、苟も其人間たるの資格に於て事を行ふ所あらば、彼れ則ち其人間たるの故を以て必らずや正しきに就き不義に去るの責任なくんばあらず、彼は笏を握るのゆえに特別の容赦を受るとなし、彼は草履を摑むのゆえに別種の認可を蒙るとなし、既に人として人の事を

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

行ふか、彼等一齊に其人たるの道德に違背することを得ざる也。

二　不仁中の仁。

然るに世人往々道德に二位ありとなし、之を此に嚴禁するに拘はらず之を彼に於て寛假せんとなす、而して啻に之を寛假するのみにあらず更らに之に理窟を附し、云く大功は細瑾を顧みるとなし、云く公德は私德と同じき能はず、云く政治家は必らずしも小道德に頓着する能はず、云く商人は先づ多利益を第一着眼とせざる可らず、云く軍人將卒は決して尋常道德の範圍内に制せらる可らずと、吾人如此き辨説を聞く每に大道の蔽はるゝ甚だしきに慨歎せざる可らず。　蓋し人世の万事は層々として發達し、層々として進化し來るもの也、故に其の後に來るものは其前に在るものよりは一層登したり、故に或は大を以て小を包み、遠を以て近を兼ぬるの理あつて存するならん、此を以て今日之を道なりとしたる所ろを之を明日に於て否なむともあらん、之を此事に於て容るゝ所ろを更らに彼の事に於て容るさゞるともあらん。例するに人を殺すの罪を侵して法律を直しくするの大道を守り、世を亂るの戰爭によりて万世を平和にするの遠望もあるべし。然りと云へども其一道德を以て一道德を無みするときは、此以て無みする所の道德には彼の以て無みせらるゝの道德を包容し去るの大理あらずんば非ず、苟も然らざれば之偽わりを以て真を敵め、不義を以て直しきを滅する者也。　故に云く道德に二位なし、別言するに吾人が正義なりと自覺する所の事は何處に至るとも亦正義たるを失なはず、吾人が不義なりと自覺する所の事は亦何處に至るとも不義たるを失はず、時に變あつて存するが如し然りと云へども此只だ一層進したる正義を守るが爲めの變のみ、敢て道德の根位を覆がへす者に非ず。

三　深山にも市にもあり。

左れば吾人は人間其の到る所ろに必らず道ありと信ず、假令ひ枝折せで深山の奧に入りたらんとも吾あれば必らずや道あり、假令ひ市に出でゝ銖錙を爭ふときと云へども人として事を爲す所ろ必らず道なきを得ず、而して其の道ある所ろ仁義道德の裁制なきは未だ決してあらざる也。　密かに奇しむ、彼の世上俗論の人が人事の地位によりて道德を輕重するは暫らく之を問はずとするも、平素道德を談じ宗教を論ずるの徒にして、尚ほ往々亦た然るが如き通辭を吐くの人あらんとは、吾人いよ〳〵大道の輕んぜらる其の極めて甚しきに泣く。

四　道德界の梁山伯。

試みに、通常道德の裁判尤も緩慢なる三つの人事に就いて之を考へんに、現に其運動の格外に活潑にして而も道德の行わる丶非常に冷淡なるは、云く軍人社會、云く商人社會、云く政治社會の三社會に過るものはあらじ。故に世人が此等の境界に在るものに對するや一種特別の寬假を爲し、其の境界に在るもの自身も亦た自から容赦する所ろに得意す、彼此ともに相許して之を道德界の梁山伯と爲す、評するものは笑つて之を豪傑なりとし、評せらる丶ものは喜んで英雄なりと心得、眞理の明らかならざる何んぞそれ如此くなるや。

五　商人

抑そも商業とは何如なるものなりや、一言するに有を無に通じ、餘れるを乏しきに運び、不用を有用に化し、以て天惠の物品を其の出來べき丈けに効益あらしめ、人類の幸福をして其の能ひ得べき丈けに幸福ならしむるものなり、若し之を小にして言わば一文菓子を鬻ぐ處ろ、草鞋を吊下る所ろ、八百品を万賣する所ろ、必らずや亦た賣るもの買ふものに多くの便益を與へたり、假りに之れあらざりしとせば、泣ける子はいよ／＼泣くべく、旅するものは益す／＼脚豆を大きくすべく、一村十戸の民は日を終へて數里外に酒豆腐を買はざる可らざるに至らん、故に其店は小さく、其の商賣は微かなりと云へども、亦た其の微少なる區域内に於て既に十分の効益を果しぬ。若し夫れ之を大にして言わば、日本の茶を米國英國に輸出し、生糸絹布を支那佛蘭西に輸出し、米麥を濠洲獨乙羅士亞に輸出し、而して支那より砂糖を、獨乙より麥酒を、佛蘭西より葡萄酒を、米國より石油を、英國より鋼鐵を、濠洲より羊毛を輸入したりとせよ、而して此の輸入輸出は啻に日本と歐米濠亞の四洲との間だに往來するのみにあらず、例へば水の必らず下きに就き、風の必らず欠くる所ろに流る丶が如く、苟くも物品の余冗あるときは必らず流出し、物品の欠乏するときは必らず流入すべし、此時に當つて大賈の職を執るものは即はち商人たるなり、彼が慧眼は乍ちにして東西の不調和を洞觀し、一電飛び來るとき既に胸算に出入の大計を畫し了するもの、豈に此の貿易商にあらずや。故に商人は國產上の不權衡を平均し、經濟上の亂高下を調和し、物品の沈滯腐敗するを防止し、人類の貧窮欠乏するを醫やす、恰かも是れ出入上に於ける治安の維持者たるなり。之を以て天の命を聽くいよ／＼忠實なるほどに、國家の幸福を受ふるいよ／＼綿密なるほどに、人類の便益を斗るいよ／＼親切なる

ほどに、彼が商人としての効益また彌よ大ひなり、即はち如此くにして彼が所得の益す大なると共に其の人世に盡し得るの功業は亦た益す高し。諺に云く最上の商政は正直なるにありと、此は言ふ迄もなし、凡そ道德の觀念尤も洪大なるものにあらずんば、世に尤も洪大なるの商業を營なむことを得ず。

六　軍　人。

又問はん軍人とは抑そも何如なるものなりや、玆に若し戰ふが爲めに戰爭すと云ふものあらば之れ獅虎狼犬の徒なり、若し功名を貪ぼり只だ一勝の勳を爲すが爲めに万骨を枯らすと云ふものあらば之れ極めて殘忍の人なり。大凡そ戰爭の目的は平和にあり、故に軍人の目的とする所ろも亦た窮極の大平和よあらざる可らず、黄石公の三畧に云く夫れ主將の法は能く無疆を圖制し天威を扶成し八極を匡正し九夷を密定するにありと、太公亦た武王に答て曰く故に聖王兵を號づけて凶器と爲す已むことを得ずして之を用ゆと、エルリントン曰く最大の悲しきことは敵に破られたるとなり次に最大の悲しきことは敵に勝ちしとなりと、皆よく眞軍人の覺悟を述べたるものと云ふべし。思ふに戰ひは猶ほ陣雷の如し、霹靂として轟鳴するとき時に家を裂き人畜を殺ろすことあるべし、然りと云へども彼は只だ其の鳴りたきが爲に鳴るものにあらず、若し夫れ雲氣中の陰陽太だしく隔絶し、天の一方に於ける乾濕明暗の大ひに混沌たるとき、電火則ち閃めき散じて此の不調和を調和す、玆に於てか雷鳴ある也、戰爭實に亦た然り、万國公定の法之を判するに由なく、若くは敵人貪噬を逞ましうして暴りに國權を破らんとするとき、則はち王師赫[illegible]して砲丸隊艦の間だに眞理の勝敗を決するのみ。之を以て眞正の戰ひなるものは恰も善惡の賞罰を國交際の上に判斷する者に似たり、其目的とする所は自由を主張するにあり、其安んずる所は眞理を守るにあり、其望む所ろは調和を得るにあり、極盡する所ろ毫末の私念邪欲を存すまじき筈なり。夫戰爭の眞の目的すでに此如し、故に戰士の眞の目的とする所も亦此如ならざる可らず、而して兩軍相接し將卒相椅るの機に於ては、强確なる道德を要すること未だ如此く甚しきはあらず、疑ふものは須らく古來幾多の名將の何如に眞實正直なりしかを見るべし。ジョンブライト等は嘗て戰はざるを以て主義となす、吾人と云へども豈に徒づらに戰ひを好むものあらんや、兵は眞に凶器、軍は決して暴りに起す可らざることを知る、然りと雖ども盜賊横行するときはピストルを要し、暴士出沒するときは

ステッキを要し、不義士抜扈するときは舌刃を要するが如く、今の時勢に於て戎事を重んずるは實に止を得ざる也、苟くも相ひ辨理して是非を斷ずるを得ず、万國に訴へて未だ義理を判するを得ざるときは、止を得ず之を干戈に問ふて勝敗の裁を請くると蓋し不道理の事にあらざる也。天は優勝劣敗の理を示し、宗教は切りに人世を戰ひに比す、再思するに人世の事何物か戰意を含まざるやあらん、只或は之を筆にし、或は之を口にし、或は之を商業にし、或は之を名譽にするの差あるのみ、故に國交際の上に於て万止を得ざるに出れば固より猝然として戰はざる可らず、而して其戰や理を判し權を伸し調和を結了するに至りて止めざる可らず、何んとなれば戰ひの目的は戰ふにあらず、軍人の目的は人を殺すにあらざればなり。蓋し戰ひは權力自由の調和者にして、軍人は此の調和に任ずる屈強なるガブリエルたり。

七　政治家。

彼の政治家なるものは言ふ迄もなく天下の治安を以て第一の目的となすもの也、其忠臣たらんよりも良臣となり、其主人たらんよりも僕となり、國民の爲に其足を洗ふの精神欝勃して初めて忠實賢良の大政治家たるを得べきなり、世人多くは政治家を以て山師の如くに見、又た投機商の如くに見る、之れ豈に政治家の眞價を悟るものならんや。抑そも政治の目的は人民の眞幸福を計るにあらずや、而して政治を是なりとし否なりとするの論評は主として利害正否の着眼點より判し來るにあらすや。果して然らば則ち尤も多く人民を利する尤も正しき善美なるの政治は即ち政治中の良政治にして、如此き政治を行ふの政治家は即ち政治家中の眞ステートマンにあらずや、此時に當りて不義姦惡虛僞狡猾の手段は何によりて必要なる乎。小政治家往々にして云く、政治社界は權謀を要す、機を見るを要す、細道徳に握促たるを得ずと、抑そも權謀とは變に處するの機智なり若し道に從はば何ぞ害あらん、機を見るに至ては哲學士も學術士も亦均しく之を要す、彼の細道徳に握促せずといふに至りては抑そも何の意ぞや、苟くも一國の土俵に立ち出で、天下最大正の偉職に任じて而して倘ほ一個人たるの道徳をだも實行するの勇あらずとせば其の勇氣のほども殆んど相分りたり。蓋し如此き暴言を爲すの政治家は其の落落たる氣象を證するものとならず、亦た大事に任ずるの器量を示すともならず、必竟極めて柔弱の人たるとを白狀するの口供とは爲る也。嗚呼政治は大あ

る善業を爲し得るの舞臺なり、一とたび茲に登つて天下に號令せば、四海同胞の善福を來らするも指を屈して待つべし、苟くも民を懷ひ、國家を憂ひ、大道を守護し、天下万世の與進化を熱望するものには、政治壇上の活演劇は尤も有益尤も爽快なるものなり、厚く道を信ずるの人は奮つて突進し茲に大ひに盡力する所ろあらざる可らず。

八　天下太平の使者。

吾人此の如く論じ來つて竊かに再顧するに、彼の商人も軍人も政治家も、均しく社會の平和幸福を希圖すべきものにして、其功業の骨髓は皆な道德の中心に出るにある也、故に大ひなる商人は商賣によりて天下を平らかにし、大ひなる軍人は戰爭によりて天下を平らげ、大ひなる政治家は政治によりて天下を平らかにす、彼等の使命は平和なり、渾沌不調和の現象を揮つて整粛治安の社界を作出するにあり、而して分散の「死」たるが如く、平和は即ち「生ち」なり、故に商人軍人政治家の主なる役目は世界に生ちを圓滿せしむるにある也、此に於てか彼等が行爲の極て道德的なるを知る、安ぞ之が裁制を緩慢にし、特に之が爲に善惡の韁をゆるくするの理あらんや。

九　生ける道德。

如此く天下到る所ろに道あり、否な道あるべし、故に道あらしめざる可らず、國家有爲の道德的年少の男女は切に之を思ひ、其の長ずる所ろに隨つて或は商なひし、或は兵士となり、或は政治家となり、或は其他の万事を爲すべし、何事を爲すに限らず道德を行ひがたきの地なく、亦た道德の傳道を爲しがたきの地あらず。願くは道德論をして啻に講釋たらしむる勿れ、願くは之をして學校教會殿堂等の間だに隱居せしむると勿れ、而して其の出でゝ社會に現わるゝときは忽まち還俗し去つて同臭味の不道德とならしむると勿れ。若し儒教を學びたるが故に商賣するに差支へ、佛教を信ずるが故に戰爭しがたしと云はゞ、蓋し如此き道德教は活世界の眞道德教たるを得ざるもの也、宗教道德は万人の必らず奉信せざる可らざるものか、左らば其の宗教道德の精神は万人の万職業に適用せらるゝものたらざる可らず、然らずんば到底今の文明時勢に効あるを得ず。左れば役事あらば其役事を爲し、教授を爲すものは其教誨を爲し、勸めを爲すものは勸めを爲し、施濟を爲すものは吝しみなく施こし、治務を爲すものは懈らず治むべし、我儕一躰に多くの肢あれども皆その用を同じふせざる如く、各々道に循ひて一躰となり亦た肢となりて働ら

くべしと、是れ蓋し活世界の活道徳にあらずや。吾人は公平に今の儒者佛者及び耶蘇敎家に勸告す、其子弟を敎ゆるとき、若くは其信徒を勸むるとき、願くは彼等に今の時勢の切迫せるとを思ひしめ、皆な據つて歌を歌ひつゝ橄欖山に登らしめよ、今の時は一室に香をひねりスマシこんで居て夫にて道徳家たるべきの時にあらず、出でよ有爲の道徳的少年子、立てよ道徳的少年子、世は今ま實に諸君の雙手を要す。

十　大久保利通西郷隆盛を弔す。

政治界の大久保利通君は殺ろされ、軍人界の西郷隆盛君は自殺したり、世人よ、我國には未だ多くの實例あらざりしゆえに、先づ此の二先人によりて少しく道徳と大事業の相關する所ろを悟了せよ、凡そ絶倫爽快の偉功は道徳の觀念極めて強厚なるものの手にあらずんば成らざるべし、此を以て今や商業社界を見れば茫々たり、軍人社會を見れば寥々たり、政治社會を見れば何んぞ無味不快なるや、カーライル云く、余はナポレヲンを見てクロムエルほどの英雄なりとせず即はちナポレヲンに於てクロムエルの如き眞實あるを認めず、彼は遥かに劣れりと。　嗚呼道を信ずるの士正に山を出づべきの時來れり、諸君何んぞ書籍を棄て、鋤を棄て、鷄犬を棄て、其の尤も平和々樂なる愉快を犧牲にして、今の紛々擾々たる亂世界に立ち出で、神よ我こゝに在り、願くは吾に爲すべきの事を與へ玉へと祈禱せざる。　少年子決して眠る可らず、宣敎師決して因循す可らず、信徒決して念佛のみす可らず、僧侶決して極樂のみを説く可らず、眼前の世界を見よ、今は改革の時也。

論説

○食物改良論

津田仙
巖本善治　同著

第二章　食物の文明に伴ふて改良すべき事。

食物の人躰と文明とに密接の關係あるハ既に明なり故に人の彌よ〳〵勉勞するに隨て彌よ〳〵多く滋養を要し文明の彌よ〳〵進歩するに隨て亦た彌よ〳〵多く良食を要するとハ之と共に明白なるべし蓋し人の彌よ〳〵勉勞するは蒸滊機關の益々盛に運轉するが如し之に石炭を加ふるの量を增すべきは勿論ならん文明の彌よ〳〵進歩するは蒸滊船の益々暴洋に進むが如し石炭を增し走力を強くして激波の難に應ずべきは亦た言を待たざるべし愛蘭人ハ平素馬鈴薯を食ふて足れりとするものあり然れども一旦苦役に服する時は直ちに之を不足と

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

すべし昔日粗食して尚ほ强健なりき日本人民の今日如此く矮小虛弱となれる者は即ち亦た全く此理の行はる、あるが故なり熟ら惟みるに日本國の文明は日に月に進步して將に歐米の開化に伴はんとせり然るに日本人民の身躰は日に月に退步し特に少年輩の益々萎縮する實に甚しきを見れば向後の日本人は將に北極地方人民の短小微力なるに似んとせり此れ吾人の尤も注意して救治の策を講ずべき者に非ずや吾人の身躰は吾輩の父翁に及ばざるあり父翁の命數は祖先の長壽なるに及ばざるなり吾人の子孫亦た如此にして止むなくんば數百年後の日本人民果して如何ん此れ吾人の尤も注意して救治の策を講ずべき論點に非らずや。

今暫く事實を舉げて此の歎の徒らならざるを證するに當り太古中古の事蹟は漠として知るべからず只だ專ら近世の事實に就きて之れを言はん「集古十種の樂器部に安藝嚴島明神に藏する樂面七ヶの圖を揭ぐるを見るに皆巨大にして現今使用の品に類せず其尤も大なる者(拔頭面)は竪一尺四分横七寸五分なり其の尤も小なるもの(貴德面)も尚ほ竪七寸五分横五寸七分あり樂面の大小は固より直に人面の大小を評するものと爲す可らずと雖ども然れども既に人面に冠りて弄ぶの器具なる以上は勢ひ之に相應せる製作ならずんば不可なり然るに今を距る七百十三年承安三年の作にして如此く大なりとせば當時の人と今人との面貌に大相違あるとを證するに足るべし又た同書の兵器部を見るに巨大の甲冑掛から中に就て著名なる人々の着用したる甲の圖に據りて其鍬形裏より後額面に至る間の距離を度るに八幡太郎義家の甲は八寸あり佐々木盛綱の甲は七寸五分あり新田義貞の甲は六寸七分あり大内義隆の甲は七寸五分あり之を今人の着用する帽子の同直徑平均五六寸に比較する時は大小の差甚だしと云ふべし四五年前洋人某が帽子の容大の漸々に減縮するを度りて今人の頭の次第に縮小するとを證したるが如く吾人も亦た之に依りて今人の頭の大に縮小したるとを知るを得るあり亦た相撲に關する記事に據りて力士が身躰の大小を度るに今の力士は到底古の力士に及ばず地中より古の刀劍を堀出すに其身三尺以上あり人の頭骨を堀出すに大なると近人の頭に似ず此他各所に遺存する古人の手跡、爪あと、足跡等を觀るに皆非常に巨大にして法隆寺に藏する聖德太子の手判所々に藏する加藤清正の手判等を見るに之を今人に比れば大小の差尤も著し然れども此等の事實は尚ほ未だ確實あらずと云ふ乎其尤も確實なるは吾人が先祖

Digitized by Google Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遺傳の甲冑父祖遺物の衣服等に就て之を檢するにあり其甲冑は吾人の躰に裝ふて更に半人を容るゝの餘地あるべし其衣服は吾人の身に着けて轉た婦人衣を曳くの觀あるべし此れ人々の實見すべき事跡にして今人の身躰古人の偉大なるに及ばざるとを確證するに足るものなり。

今人の身躰古人に及ばざると如此し、是れ果して何の故ぞや或は云ふ今人の食古人に及ばざるの故なりと然れども事實に就て之を考ふるに大に然らず古人は反つて粗食し今人は良食するが如き證跡多し是れ尤も不可思議の一點なりとす。

此故に今亦た暫く此一點を考察せんが爲に二三の書に就て先づ此の事實の證跡を尋ぬるに古昔は主として玄米を食ひたり(伊勢太神宮春日神社等には尙ほ粗平の米及び黑米を供す)、主として乾米を食ひたり(天正の頃ろ大に流行したり)菜飯の粗なるも尙ほ馳走とせり(おあん物語り等に見ゆ)芋粥の野なるも尙ほ大饗に供したり(江家次第其他に見ゆ)此他菜肴として副食したるものゝ亦た甚だしき無味の品なりしとは北條時賴の執權となりて大佛宣時と酒を飲むに味噌を肴とし織田信長の角力を賞するに燒栗三箇を用ゐたりとの古話に據りて其一斑を知るべし今此等の事實を確證するが爲に更に四五の談話を左に揭示すれば、

藤堂高虎が酒井雅樂、土井大炊等を招待して馳走する時は大根の汁又はモックの冷汁あらめの膾田作り香の物等の五色に過ぎざりしと藤堂文書に見ゆ是れ二百七十年前頃の事なるべし。

大猷院樣の御代御咄衆とて每日登城して御談話等申上られし衆中は毛利甲斐守秀元、丹波五郎左衛門長重、蜂須賀蓬庵、林道春等なりこれらの衆中かはる〲登城してそれ〲の館より辨當參りけるとて萩の間にて寄合ひ之を食し給ふ珍らしき菜などあれば互に取りかはして賞し給ひしとかや、毛利侯の辨當に鯉のありければ此は珍づらしきとて皆々賞味せられしと也阿部對州は燒飯を紙に包みて持參し御晝食に召しあがられし其包紙の皺を伸して其紙に付きし飯を拾ひて喰べられ其あとにて鼻をかみなどせられし云々と夜譚隨筆に見ゆ是れ二百六十年前頃の事なるべし。

明曆大火の後に淺草金龍山門前の茶店にて始て茶飯豆腐汁煮染豆等を調へて奈良茶と名付て出せしを江戸中はし〲より食ひに行んとて殊の外か珍らしきとに興じたりそれより追々さま〲の美膳店出來たり云々と事跡合考に見ゆ是

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

れ二百三十年前頃のとなるべし。
仙臺樣台命を以て仙臺堀を堀りぬかれける頃ろ水府義公より御辨當として黄粉むすびに芋の煮ころがしを多くこしらへて贈られけると或人撥書に見ゆ是又二百二十餘年前頃の事なるべし。
有德院御代始に儉約の仰出されにも凡て嫁取りの規式も蛤の吸物酒三献を過ぐ可からずとの書付出たりと明君享保錄に見ゆ是百七十餘年前頃の事なるべし。
享保半頃まで途中にて價を出し食事をせんと思ひも寄らずと衣食住の記に見ゆ此又百七十年前頃の事なり常時の常食推して知るべし。
此他尙ほ諸書に散見する所に據りて之を考ふるに古人の食は到底今人の食に及ばざることを知るべし蓋し今人の食假令ひ尙ほ可なる者にあらざること勿論なりと雖も然れども之を古人の食に比してその多少優る所あるは明白の事實なり然るに今人の身躰如此縮少し如此く短矮となり如此く虚弱となれるものは何の故ぞ吾人若し天保出生の人と慶應前後に生れたる者との身躰を比較して所云る健康と身丈との統計表を作らば今人の古人に劣るその割合の尤も甚しきを認るならん敬宇中村先生常に吾人に語りて云ふ日本人の人相は維新前と近來と餘程の差を生じたる樣思はるゝ所あり以前の人相は何となく福々しかりしが近來書生杯の面を見るに頬こけ躰格小さく何となく貧相になりたる樣思はると吾人も實に此言の當れるを覺ゆるなり三百年前に繪きたる屛風又は繪卷物を見るに皆よく太りて頬肥身躰も何となく豐かにして人相甚だよし然るに今は貧相にして喪家の犬の如く短矮にして北極の人に似んとす若し如此退歩して止まざるときは日本人民は遂に貧相なる一寸ぼふしとなりて憫むべき侏儒の一種屬とならん吾人は實に之を好まざるものなり。
食物多少進歩して而も身躰の如此退歩するは何の故ぞ曰く是れ食物の進歩の文明に進歩に伴はざるが故なり之を喩ふるに文明は十歩を進み食物は五歩を進む人躰は遂に五歩の退行を爲さゞるを得ざるなりスペンセル氏が古今の人もし同樣の食を食ひたらんにハ今人必ず古人よりも小身とならんと云へりしハ即ち今人の事務の繁雜にして身躰の疲勞の遙かに古人に優る上に就て立論したるなり況んや我國民の如く維新以來如此く頓に開化し如此く急に文明を得たるものに於て若し又た相應に食物の改良を計らざるときは是身躰を運動して之を養

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

はざるものなり汽關を運轉して石炭を増さゞるもの也如何ぞ其の縮少して短矮となり虚弱となり貧相となりて大に健康を失ふことなきを得んや故に云く食物は文明の進歩に伴ひて改良せざるべからず我國の如く頓に開化して急に文明の度を高めたるものは特に食物を大改良して人民勉勞の需要に應ずるの計を爲さゞる可からざるなり。

批評

○米國女子大學規則

數月前來、米國エルスレー、ウエスレアン、ブリンモウル、パッサル、等の諸女子大學校長より、弊社に其校規則及一覽表の類を寄送せられたるもの多し、故に今後其規則大要を本欄内に掲げ出して且つ愚考する所ろを加はふべし、此れ本邦同志者の參考に供ふる一助とならば幸わひならんと思へば也

第一　バッサル、カーレーヂ

校は米國ヲルバチー、ニウヨーク兩都の中間に位ひし、ポウキプシーを距る東の方二英里に存す。一千八百六十一年即はち二十九年以前に於てマセウ、バッサル氏の發意によりて創設せられ、向來尋常の諸大學が男子の少年を教育するほどに、同じく年少の女子を教育せんことを主旨とせり。

入校者資格　本校初級に入らんとするものは英學に於てはシエクスピアのハムレット、スコットのアイバンホー、イルビンのスケッチノック、ハウソルンのマーブルフハン（以上は昨年入校者に對して）若くはシエクスピアのジウリアスシーサー、並に中夏の夢、コーレリッヂのエンシエントマリナー、ロングフエローのエバンジエリン、マコーレーのクライブ傳、サッカレーの英じウモリスト、ゼッヂヰリツットのサイラスマーナー、等（今年入校者に對して）の中より文題を撰出し、之に據りて三乃至五頁の論文を作らしむ、而して文は文法修辭學等に於て全く十分なるべし。

此外、地理、歴史（合衆國史、希臘史等）、數學、代數、幾何、羅甸語、其他に希臘、日耳曼、もしくは佛蘭西三國語中の一つ、以上の資格あるもの。他に之に相應する學力ありと認めらるゝもの。

之に據りて考ふるに、現今京濱間の女學校の教授法にて教へらるゝものとせば、大抵七八年の修業を爲したるものにして初めて此等の資格に相應すべし。

學科課程表　本科を四年に分ち、卒業生を技藝得業生とす、卒業後更らに本校に止まりて修業し試驗に及第したるものを技藝學士とす、以上兩學位を受たるのち若くは之に相應するものにして更らに三年獨學し、但し其内の一年は本校にて學びたるものに對し、哲學博士の學位を授く。

本科初級學科

前　期

羅甸語（四）。希臘語（四）。日耳曼語（四）。佛語（四）。數學（三）。博物學（二）。修辭學（一）。英文學（一）。雄辯學（一）。（合計廿四時間）。美術歴史講義。

後　期

羅甸語（四）。希臘語（四）。日耳曼語（四）。佛語（四）。數學（三）。博物學（二）。修辭學（一）。英文學（一）（合計廿三時間）。能辯術。

同第二年級

前　期

羅甸語（三）。希臘語（三）。日耳曼語（三）。佛語（三）。數學（三）。修辭學（一）。英文學（二）。歴史（三）。（合計廿一時間）。

後期は化學、天文學講義等あり。

同第三年級

前　期

羅甸(三)。希臘(五)。日耳曼(五)。佛蘭西(五)。修辭學講義。英文學(一)。博物學(四)。天文學(四)。化學(四)。數學(三)。歷史(三)(合計三十七時間)
後期には論理學、美術歷史、能辯術等を加ふ。

同第四年級

心理哲學(四)。羅丁(三)。希臘(二)。日耳曼(二)。佛蘭西(二)。天文學(三)。物理學(四)。化學(四)。アングロサクソン(三)。英文學(二)。數學(三)。博物學(三)。歷史(四)。美術史(二)。(合計四十一時間)。
後期は論理哲學、生理學、經濟學等を加ふ。

學資　月俸月謝一切　年四百弗。卒業生來學同三百弗。音樂給費生は別に一百弗增加。別に特別貸費もしくは恩給生の仕組あり。

生徒　現今卒業生來學者三名、第四年生四十九名、第三年生四十四名、第二年生三十七名、第一年生七十三名、撰科生三十九名、畫科十四名、音樂科五十二名、合計三百十一名なり。

校制　議員二十九名、內議員會役員三名、同監督一名。議員會常置委員を九部に分つ、事務員七名、學務員七名、書籍部員七名、標品室及機械員七名、美術品及展覽員七名、音樂校員七名、スカラルシップ員七名、出納員三名、撿査員三名。校政敎育部三十六名、內校長神學博士テーロル、女子敎長グードセル、其他敎授、敎諭、書記。

大畧右の如し、同校長テーロル氏の來書に云く、同校に來學したる日本女生二名あり氏は常に之を紀念して終始思はざるとなしと、蓋し伯大山巖夫人捨松子は同校の卒業生にてあるなり。横濱フエリス校長ブース氏此の校を一覽したる時の事を吾人に語りて云く、校舍盛壯、敷地廣漠、內に大池あり船を浮べて女生の競艘を爲さしむ、氏は之を觀て感泣し、日本に早く如此き女大學あらしめよと祈りたりと云ふ、以て同校の盛況を推知すべし。

惡事に走る人に付ての第一の心配は是也、即はち彼が往復切手を所有せず、只だ往路の切手のみを有すると也。

雜錄

○主義の人

三苾居士

世に萬卷の書を嚙み食ふて腹便々理を吐き法を說きて獨り甚だ恣なる者あり之を讀書の人と名付く國家實に斯の如き人に要あり又世に身寸鐵を携るなく只三寸不足の舌を振ふて傍に聽く者を壓倒し再び起て之に抗する能はざらしむる者あり之を辯舌の人と名付く國家實に此の如き人に要あり世に一錢の資あるなく只其機智才能を利用して忽ち富をなすこと巨萬王侯と相來往して勢威甚だ盛んなる者あり之を事業の人と名付く國家實に此の如き人に要あり又世に匹夫賤奴の低地より蹶起して昇段頻りに高く官位終に人臣を極むる者あり之を立身の人と名付く國家又實に斯の如き人に要あり此等の人皆な一國文化の要素の內に數ふべき者にして悉く尊敬すべきものなり貴重すべき者なり然り而して今茲に更に甚だ國家の爲に有要にして又更に甚だ尊敬貴重すべき者あり曰く信ずる所ろ堅く期する所ろ强く一たび爲すべしと見て爲さゞるはなく爲すべからずと見て爲すあるなく勢威も以て之を恐怖せしむるに足らず名利も以て之を服隨せしむるに足らず其然るを然りとし其然らざるを然らずとす歲月に移らず境遇に變ぜず一意一

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

心以て一たび其主義とせる所を貫徹する者是也即ち之を名付けて主義の人と云ふ此人こそは實に人類歴史の眞心一國社會の柱石也試に此類の人を有せざる時代の歴史を見よ暗黒の時代ならずや腐敗の時代ならずや又試に此類の人を生ぜざる一國社會の狀態を見よ破裂の社會ならずや瓦解の社會ならずや一人にして一世代の運命を造り一社會の進步を致すものたゞ此類の人に在りて存するなり蓋し東西國同じからず古今時一ならずと雖ども此類の人は常に國家の恩人なり人民の救者なり今や我國讀書の人を有すること少からず吾人之を賀す辨舌の人を有すること少からず吾人之を賀す事業の人を有する少からず吾人之を賀す立身の人を有すること少からず吾人之を賀す而して此主義の人に至りては其多きと少きと未だ詳に得て之を知らざるなり汝ぢ何を見んとして野に出しや風に動かさるゝ葦なるか汝ぢ何を見んとして朝に立つや冠冕を着たる人なるかアゝ悲夫天下主義の人甚だ尠矣。

○深き愛と別離　もみぢ

余は久しく別れたる友人に會ひたり、胸滿ち口塞ぎ何と言ひやうもなし、暫時の會合なれば最も言ひたきを言わんとて、彼や此れよと考ふるうち早や時刻は移れり。君よ待ち玉へ妾わを忘れ玉ふな、忘れ玉ふなよノウ君を愛するの人を、嗚呼離ちがたし何如なれば今ま相別るべき、人間生れて人を愛す抑も斯る苦しみなくては相愛するとを得まじきか」。君が姿は最早や失せぬ、天は默して高く水音すさまじ、靈しひよ汝ぢは限りなく人を愛して而して汝ぢが命に限りありや、嗚呼生別死別も止を得ずんば愛情にも亦た限りあらん、妾わが愛は限りなし、何如でか此世のみにて終り果てん。

○吾良人に請ふ　かすみ

良人よ、君が優なる姿、君が温乎たる風采、君が實着信切なる言行、君が高尙神雅なる感化力は、多くの敬服者を君が周身に集め來り、彼等は皆な君が一温言、一握手を得てだに無上の幸わひとせり、而して君は何の惜しむ所ろもなく、心を盡し、情を盡し、言葉を盡して彼等に信切たり、彼等が喜こびや更に無上、彼等が君に敬服し親愛するや更らに尤も大ひなり、妾わ之を以て榮擧となし、此の良人を妾が一生の良人となしたるの大幸福を感謝し侍る。左れど良人よ、君願くは彼等に與へ玉わざる、只だ妾にのみ貯ふ所ろの、一種の特情を賜れ、唯だ一つにても何如なるものにても、只だ彼等に異りし博愛中の一別愛を惠み玉へ。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

ふ、ち、

○馬琴小說の効果

蕉門の十哲中にて最も達識にして奇才に富むは晋子其角なり、然れども芭蕉は却て嵐雪の素直にして師道を墨守するを愛せり。蓋し其角は極めて巧句を吐けども其角にして能く是をなすべし他人もし是に倣へば所謂虎を畫いて猫に類するの恐あればなり。果せる哉芭蕉歿後其角は愈々俳諧を振起せしが一派の江戸坐は終に正風を錯亂して梅室出るまで俳道殆んど腐敗せり。彼も一世の名流にして五元集焦尾琴等を繙けば千載希有の奇才を賞讃せざるを得ざれども偶然の結果とは云ひながら其奇才は師家の正風を衰亡せしめたり。

曲亭馬琴は文化時代の我國小說の改革者にして文學史中に特筆すべき大家なれども其改革は全般より評すれば我小說を退歩せしめしにあらずや。

源語狹衣等の如き國學者が語格を研究する材料となりしは扨置き中興の西鶴其碩の著述を見るに趣向よりは寧ろ人情の微を穿つに意を專らにせしが如し。其文章は極めて婉曲なりし故後人の稱揚するは單に是れのみに止まりしかど、反覆熟讀せば情致を曲寫せし巧妙忘れがたし。其後京傳出で所謂しやれ本（俗に蒟蒻本と云ふ）なるものを作りて遊里の情を盡せし妙味我國に於て蓋し一人ならん。斯の如く全般より云へば我小說家の傾向及び讀者の嗜好も情致にありし事は知らる（唯黄表紙の作者喜三二春町慈悲成等は滑稽なりしが）。然るに馬琴出でゝ一家の文を作り水滸傳流の趣向に勸懲の分子を加味し天下を風靡せしかば餘波の及ぶ處馬琴風ならでは小說ならじと考ふるに到れり。絕世の逸才を抱きたる京傳すら稻妻表紙本朝醉菩提を著はして馬琴に摸倣せしにても當時の傾向を知るに足る。實に馬琴の文章及趣向は共に一家をなしたれども唯馬琴能く之を爲すのみ餘人の摸倣すべきにあらず。然れども流行の勢力は三馬及春水の徒を壓倒して日本小說を盡く馬琴ならしめたり。今若し假に馬琴出でざりしとせば日本小說は必らず洒落本より進化して面目を改むる事豈春水三馬に止まらんや。明治初代の文學は戰亂の餘を受て退歩せしと云ひながら舊小說家高畠種彥篠田仙果伊東橋塘染崎春水等の諸氏が立案は盡く勸善懲惡の範圍を出でずして遂に春の屋朧氏をして大呼せしめし原因は皆是れ馬琴小說にあらずや。夫れ斯の如くなれば馬琴は日本小說の改革者たれども其改革は不幸にも日本小說をして退歩せしめしものと云ふべし。

山には終南嵩華の高きを見、水には黄河の大且つ深きを見る。（哲子）

○麥の穗

松の舍緑

一人の農夫が其兒をつれて畑へ行きました。麥が熟したるや否やを見んが爲めに。其時童兒は斯く問ひました。「父よ。此に在る二三の麥の穗は。斯樣に低く地上に傾ひて居ります。があちらに在るのは。正直に頭を擧げて居ります。是れは何故でせう。あちらの頭を高く擧げて居る方は。身分が貴くッて。コチラノ彼レの前に。腰を屈曲ソシテ頭を下げて居る方は。身分があれよりも賤しいからでせうか。」父は一對の穗をもぎ取り之を童兒に示しながら。斯く曰ひました。「サーゴラン坊ヤ。コチラノこんなに謙遜して腰を屈めて居ッた所の穗には。甚だ美しき實が一パイ滿ちて居ります。けれどもあちらのあんなに高慢そうに。頭を高く擧げて居ッた所の穗は。全く粃でチットモ實はありません。」

故に頭を高く擧げ餘り威張て歩行く者は此の粃の穗の如く恐らくは實のない生意氣者であります。

○神の愛

楠亭仙士

神の愛は至正なり、至中なり、無私公平なり、無私公平なる熟語は神の愛にして初めて當れるを知る‥‥神は貴きと賤しきとの境に惠みの笆を結ばず、富めると貧しきとの瀬に情の柵みを設けず‥大空に懸れる淸き月‥研澄したる鏡みの如く光る月‥彼の月は神の造らせ玉ひたるなり、神ならで誰かは斯る物躰を造り得べきぞ、將た造らずして物ある可き道理はあらじ‥彼の影を見よ‥彼玲瓏たる月影を見よ、如何に詫しき蜑が苫家をも辭せず、如何にいぶせき賤が伏屋をも厭はず、皎々たるその光りは荒たる軒の庇を洩れて網を繕ふ漁翁の邊‥綯のふ村女の傍はらをも照すにあらずや‥‥いやしきになさけ隔つるものならば賤が伏屋に月は照らさじ‥‥

淸少納言‥枕草紙の撰者にて有名なる淸少納言‥‥才藻富贍文詞麗艶なる淸少納言はその草紙に於て似氣なきもの丶部中にいへらく「げすの家に雪のふりたる又月のさし入たるもいと口おし」と微妙じき雪の景氣、月のかげを愛むは然ることながら天つ御神‥天の父の人を愛し給ふ、なぞて貴賤の差等あるべき‥神の愛には希利尼人と士希布人との別あることなし‥天の父は雨を義者、不義者の上に降し、日を善者、惡者の上に照し給ふ‥‥予は淸女が筆の善惡なきを恨らむ‥神の愛に戻るの不正を憾む‥予は彼の如き文字の早晩世に排斥せられんことを願ふなり。

小兒は何の用をも爲すまじ然れども後には大人となる(フランクリン)。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○兼好法師の寃を雪ぐ

鶴谷外史

傳へいふ兼好法師、高師直の需めに應じ鹽谷が妻の許に遣したる艶書を作りたりし」と此事大なる誤説なり兼好は左馬頭卜部の兼顯が男にして吉田の社司の家に生れ學、古今に通じ才、倭漢を兼ね平素忠勤の志厚かりしが一朝感ずる所ありて人事無常の賴なきを悟り遁世の念止み難く遂に狩衣を墨染の色にかへ俗稱を其儘法師名に呼びて

おもひたつ木曾のあさ衣淺くのみ
　　そめてやむつき袖のいろかは

と詠じ跡を雲水にたくして東漂西泊の世棄人とはなられし人なり何の苦しむ所ありて勢家に媚び權門に諂らひ道ならぬ悪路のあだ文を作るべきやは」と余は年來之を疑ひしが果せる哉此頃「ならびの岡」てふ書を見るに左の事を載たり因て少か抜記して俗間謬妄の説を駁し聖師百年の寃を雪がんと欲す、
兼好、高師直がたのみによりて妻のもとへ遣す文をものせしとさして人の口すさみにのこるはまことしからぬとなり室町の記を見るに兼好に師直たのみて世の追福の爲に五十首をよほせしとあり序など書て愚老がかたにも寫しつたへしなりけるを世にはいふなるべしさらに文を書てつかはせしことなし云々。

○玉堂隨筆　（六）

南石外史

大文章巧文字

洪々洋々として大川の决するが如く意到り精至り力到るもの之を大文章と云ふ、綿々として絶へず燦爛として麗らかに彫刻結構の跡歴々として認ぜらるもの之を巧文字と云ふ、大文章と巧文字との多少によりて一國の文運及び國民の氣力精神を見るべし、デクエンシー嘗てチャーレスラムを評して曰く失樂園、ハムレット、ノーバムヲルガナムは大文章なり、「ゼ、レープ、ヲフ、ザ、ロック」、「ダンシアド」、「バイカル、ヲフ、エークヒールド」は巧文字なり、と嗚呼今の日本にはミルトン、シエクスピア、ベーコンを學ぶもの果して多きか、抑うも亦たポープ、ゴードスミスを學ぶもの果して多きか。

美男子大豪傑

曹操錦の袍を着駿馬に跨がり大音上て汝等西涼の輩曹丞相を見んと思ふか我もこれ常の人也目四つあるにあらず口兩つあるに非ず世の人に勝はりたるはたゞ智謀の深きのみと呼はりける。李克用年二十八諸將の中にて最も少かし而して兵勢尤も彊よし黄巣を破り長安を復す其功第一、諸將皆之を畏うる、然るに克用は一目微しく眇なりしかば時の人之を獨眼龍と云へり。美男子と豪傑とは必らずしも兄弟にあらず。

剛毅將軍眞僕

ゴルドン將軍埃及に趣きしとき日耳曼人の一僕を隨へしに一日僕其の間を伺ふて逃亡せり將軍は奉公人の待む可らざるを歎じて其日記中に記して云く余が眞僕は余也此僕や常に余の欲する所ろを爲せり。

蜘蛛と蜂の話

聞く熊野の宮司某は風流の人ゆへ何事も念入て見る人なり或時蜘蛛と蜂と戰ひしを見しに蜘蛛が蜂に刺るゝや否や下り降りて急ぎ畠の方へ走る、怪しみて追ひ行しに芋の葉を食ひ破りて汁を出し昧に塗附けたり扨ては蜂毒を消す効やあると思ひ自から刺れしとき試みたるに直ちに治せりと云ふ、之を聞きし一友亦た試みしに直りたり。某又云く嘗て梨樹へ蛇の登りゆくを見てありしに蜂巣に近づきしころ數尾の蜂群り刺せしかば下りて畠の方へ行き芋の間を特更にうねり廻り或は腹を出す迄に倒さまになりて廻り行きたり自ら知らざりしが蓋し此理あるならんと。一友亦云く蜘蛛は其巣の一部分が破れたるときは之を繕ふには元と一本の糸ありしところに二本の線を張る。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

如此く押し付るは
非道い事にあらずや、
然り〳〵。
此の男の如く女を壓制するは
實に殘酷なことにあらずや、
ノウ〳〵否〳〵。

○まな板の管略

百姓二三人地頭方へ御用にて參りけるが折ふし臺所に釜ぼこありしを一人の百姓いふやう扨てお地頭様にも諸事御管略なさるゝはあの魚を見やれ板にとりつけてあるが定めて切るときに俎板の入らぬやうにしたものさうなと、庄屋聞きて扨て〳〵途方もないといふてお侍らひ衆に笑わるゝなあれは今日のお料理になさるゝ杉焼と云ふもので杉の板に付けて焼たものじや、そのやうなことを云へば知つたをらゝ迄が外聞が惡い。

○名乘らねど今の實盛

物には目じるしがなうては適はぬ、墨遣ずんど兵衛と云ふ男風呂屋へ行き亭主に大小を預け入りにけり、漸やく風呂より揚り先程の大小を給はれと云ふ、亭主顔を見て其方より何も預かりはせぬと云ふイヤ確かに二腰を預けたわたせと云へば亭主も存じもよらぬと壁ほどの物も預からぬと云ひければ、ずんど兵衛はいかにも合點して勝手へ行き鍋炭にて髭をつくりて出ければ亭主之を見て、何如にも見知つた顔じやとて大小をわたした。

○大それた娘の博戲

高慢らしく万葉を手にするキヨロ〳〵眼の束髪に同じ束髪の友達が「軽田さん、あなたの讀んでるものナアニ……」
「万葉よ」
「万葉、大層勉強ネ……今朝ッから。トランプは止して」
「嫌よ、トランプなんテ。先生に叱られたワ」
「さふ……感心、博戲は道徳の禁ずる處ダワ。……ダが萬葉ジヤア長歌短歌どちらがお好き？」
眼を釣上て「人を……博戲は致しませんよ」

○六錢の豪勇　近眼法士

或る蘇格蘭の人が旅行を爲し居りし時に途中で三人の泥棒に取つかまりましたから必死の勇氣を出して之を防ぎました……泥棒も余程困難の様でありましたが漸く之を地上へねぢ伏

せました斯樣に強く防ぎました故に定めて大金を所持して居るのだと思つて其懐中を探りましたら此人は・・・如何で・・・タッタ六錢しか持ちませんでした泥棒は此には大に驚きました此時泥棒の一人が言ひますにはタッタ六錢の金の爲めに此程強く防ぎし位だから若しも此人が十八錢持つてたならば己等は殺されたであらふ。

兒籃

○乙女亞利斯（二）

波月子

血に塗れたる獵師、雷の如きキードの谷川、雨つながら小娘の肝をとりひしぐ筈でス、しかしさのみアリスは恐しそうあ樣子も見えませんがそのかわりタイガーの山越をすると云ふ事を考へる時、母の許に五時迄に藥を屆けずば命が危い事あどを思ふ時は、悲しさの感が胸一杯にあつて來ます、しかしキード川の橋が渡れずはドーシテもタイガー山を越えずばなりませんアリスはキット覺悟をしました獵師より受取た野刀と袋を腰に付て最前獵師が指示したる林の方へと歩み行きました道は暗いのみならず行手は二里の難所です、しかしアリスはよく山道には慣れて居りますからさのみにも思ひません進み行く事一里計りその邊が屈竟の恐しき險岨なる道ですいそぎにいそいで行く向より一聲高く叫ぶものがあります、ト見れば一人の婦人が髮を亂して息せき切てかけ來るノデス、アリスは角燈によく〳〵すかし見れば年の頃は三十計りの婦人です近くまゝに彼の婦人は聲を立て　お孃さんあなたわこれから何處へいらつしやるおつもりですか少な方の僻にタイガー山をひとりで御越しなさるとわ、そしてもう先へは行ません、およし遊ばした方がよう御坐います大變デスカラ　何事かありましたノデスカ、エどんあとが　イーエモー大變です四五人の盜賊が卅前後の病つかれた女をとりまいて・・・　何ですと三十前後の。アリスの驚き多分は母が、さなくばこのあたりに病る女と云ふはない筈、　一寸と伺ますがもしやその女は茶の上着を着ては　エー夜目にはつきりとも見ませんがそうらしいようデシタ　この言を聞や否やアリスは彼婦人に言もかけず疾風の如くに飛び出ました。

星月夜に閃めく火影さてはかしこに盜賊どもがと近くまゝに身をちゞめ足音をさせぬようによう〳〵と傍らの木影に忍で樣子を見ますと果して四五人の盜賊共手に手得物を携へて人待顔にいろ〳〵の話しをして居ります　ドーシタろう大層遲

いちやチーカ　さつき此所へ來かゝつて急いで逃たのがそうジヤーナカローカ　それにしては大分大きい女ダぜ、アリスと云ふ娘が來ずば頑八が來る筈ダガ　キードの川デ何でも遠くに見えたピカ〱した光りは巡邏卒ではないに違ひないわんまりわはて過たから飛デモない事をして肝心の品物を取りそくなつたノダ馬鹿〱しひ　ダガその御かげてキード川を渡る事が出來タノダぜ　それはそうとあの女はアリスと云ふ小娘がぐづ〱云たら殺すとか何とか嚇かしてやりやーすぐによこすに異ない。いろ〱の事を物語り居る間亞利斯はそつと木影を立ちいで。何思ひけんもと來し道へ行きかゝりましたが遠くよりまた人聲がしますから手にある角燈を吹消して母上はいずれに居玉ふらんとわたりをかき探りましたが何處へ置きしか更にわかりませんちようどこの場所はもう麓の吾が家へはぢきデス一番鷄の音がかすかにコケコッコー。

史傳

○西行法師

しのぶ

昔し仁安の頃ろ西行はるゞ〱と西の國に修行したる際み讚州白峯に登りて新院の御墓に詣でぬ、時に只だ峯の松風はげし

きのみえて鳥だにも語らぬ有樣、一天の君万乘のあるじも然の如き最後とあらせ玉ふを見ては、

よしや君昔しの玉の床とてもかゝらん後は何にかはせんと歎きたり。彼れ亦た嘗て越路に遍歷せし折り、年の盛りなるは申すに及ばず頭はしきりに霜雪を戴だき腰はそゞろに梓弓を張りかゞめて今日明日とも知らざるものゝ、只だ暫しの程の命を資けんとて若干の僞はりを構へ人をたぶらかして賣買するを見、すゞろに涙のこぼれて歎じけるは、

むあしく北邙の露と消えぬる夕はむつましかりし妻子去りがたかりし親子も抱へ持たんと云ふ事や侍らん只だ急ぎて野邊に送り薪に積みて一片の煙にたぐへては空しく橫ぎる雲計りをうらみ朝たに行て別れし野邊を見ればあさちが原の秋風のみ身にしみて僅かに名殘と見ゆるは形もなき白骨なり。

嗚呼一と度び世を觀ずるときは何人ぞ皆ある斯の如くに思ひ到らざらめ、西行は生れて豪宕有爲の氣象を懷き、天才煥發して世の常ならぬ學識あり、鳥羽上皇の愛を受けて申す所ろ聽かれざるなく、咏み出る所ろ殿上人を驚かさずと云ふとなし、左れど彼れは未だ如此きに滿足する能はす、一夜友人の某は

かに死せるを見て俄然として發心し、愛女を蹴り妻を棄て功名を抛うちて出家したり。
之よりして足跡天下に遍ねく、筇を万丈の嶺に引き、跡を千丈の谷に埋め、春の宵秋の夕べ花の朝た月の夜半皆な其の吟腸の料とはなりぬ、嘗て日本惣追捕使に敎へて門前に銀の猫を投じ、怪强武骨の文覺に會ひて快ちよく其の心を挫ちく、其頭らは舟人にたゞに叩かれたれど、膝は王侯の前に屈すべきにあらず、胸中風光名月に滿ち、洒々落々として物我の差別あらざるが如し。左れど人もし彼が撰集抄を讀みもて行かば、其の冷やかなる悟りの情ろは未だ人間自然の情を盡さゞるを見るべく、亦た彼が嘗て大磯の邊りに杖を休むるとき、暮色凄凉にして蘆頭風に動き、天地寂寞として滿景に聲なき折り、一鳥飛んで磯を離るゝを見、乍まち愁絶し、

心なき身にもあわれは知られけり鴫立澤の秋の夕ぐれ

爾く歎ずるぞ是れ人間の本色ならめ、大凡そ人は自然に愛情を有す、此の情や躬から犧牲にして他に仕へ、全心を盡して己が思ひを與へんとを希ねがひ、而して亦た人の如此く我に親しみて彼此れ全く同一躰とならんとを望む、故に偶たま世を觀じて世人を棄つると云へども、而も我が自然の人性は我に身外の何物をも悉とく棄つるとを許さず、たゞ物を變へて我が情を寄するの地を別になさしむるのみ。西行或る時櫻花の爛熳たるを見てよめるに、

願くは花の下にて春しなんそのきさらぎの望月のころ

嗚呼人或ひは此の句を見て彼が淡泊無上の名吟とやなす、左れど余はこれを以て彼が心の底の悲しき述懷とは見るなり。
嗚呼一とたび悟るときは妻子珍寶何れか空にあらざるべき、思ふに空の又空、虛榮の又た虛榮たり、只だ余輩は之を空とし之を虛榮として更らに別に求る所ろあるを知る、若し夫れ之を棄てゝ他に代り安んずる所ろを得ずんば其人の不平果して幾千ぞや。抑も余は世を棄てたり、而して后ち世に反り來れり、世に於て何の求むる所ろなし、只だ世の爲めに求むる所ろあるもの也。
因に云く開卷第一葉鴫立澤西行庵の圖及び文覺上人刻む西行像の圖は、此頃ろ末松謙澄君大磯に遊びし折り持歸りて吾人に惠送せられたるものに據る。

つれもなくなり行く人の言の葉ぞ秋よりさきの紅葉なりけり　（西行）

○松本いと子

星野光多

今の世に在り汎く女子の中に於て婦女子の榮譽として之を世に公にする價値あるものは松本絲子の一生なり余の知る所ろ妙齢の女子多しと雖も未だ嘗て其容貌の温和優美絲子の如き者多くこれあらざるなり余の交る所ろ愛す可き女友亦多しと雖も未だ嘗て其性質の純精玲瓏絲子の如きもの多くこれあらざるなり余絲子を識ること既に六年子として之を識れり實に孝子なり學生として之を識れり實に三日刮目して見る可き者なり妻として之を識れり實に貞妻なり基督信者として之を識れり謂ふ所の「髪を辮み金を掛けまた衣を着るが如き外面の裝飾に非すたゞ心の内の隠れたる人すなはち壞ることなき柔和恬靜なる靈を以て裝飾とするもの謂ふ所の「靈と眞を以て天父に奉事せし者」なり今やまさに之を母として識るに至らんとして絲子一朝にして北邙山下一片の煙と消ゆアヽ余が遺憾なんぞ限りあらん今其小傳と其生前の書簡觀る可きもの若干を集めて一小冊子となし以て世の絲子を識るものに頒たんとするはたゞ其父勘十郎君の請あるが爲めにあらざるなり。

松本絲子は勘十郎氏の長女元治元年十月二十九日上野國山田郡桐生町に生る父母の膝下に在て其十一歳の頃まで家庭の教育を受け其後父母に別れ同國西群馬郡倉賀野驛に在る祖母の許に移り養育せらるゝこと三年普通小學の教育を受く後東京に至り母と共に居るに及んで絲子の學はんと欲する所ろ甚だ切しと雖も當時父母は未だ教育の何物たるを辨知せざれば絲子の望に協ひて之に充分の教育を與ふるに至らざりし之れ後年絲子をして頗て轉たゝ遺憾の情に堪へざらしめし所のものたり其後父母倉賀野に歸住するに從ひ茲に移り住れり斯く數回幼少の時或は父に離れ或は母に離れ住居の地を變し境遇の種々なる間に成長せしことは絲子の爲めに教育上大に不利益を與へしものゝ如しと雖とも其實は反て彼れの性質を鍛錬せる所の最も有益なる修練たりしなり光多が始めて絲子を識れるは明治十六年の夏にして光多基督教傳播の爲め上州に至れる時にありき既にして松本氏擧家該教を信じ信仰最もつとめたり而して其間に在りて信仰の女王として父母を勵まし僕婢を誘導せるものは絲子なりアヽ余は回想す絲子が罪を惡む事の蛇蝎よりも尚ほ甚しく一たひ自己に之れありと知る時は哀泣殆んと慰むべき辭を知らざりし事ありしを父母新に道に歸すと雖とも久慣の勢力偶々道に協はざることを爲さんとするある時は絲子よく諫めよく支へて之をして大過に陷るなからしむ明治十六年九月四日赤太郎氏と結婚す氏は本性飯野氏にして同國高崎の人なり是より先き數年松本氏の猶子となり當時同志社英學校の學生たり結婚の翌々日赤太郎氏は再び京都に向ふて出發す是れ一は志を遂せんが爲なりと雖も一はかゝる境遇亦止を得ざるに出つるものにして當時新夫婦の心情思ひ察すへし其後絲子修學の志益々熱く終に父母の許を得て妹伊佐子と共に横濱なる山手共立女學校に入學し積年の志願初めて其緒につくを得たり、これ實に明治十八年十一月の事にして其廿一才の時なりし絲子此校に學ぶや常に其同窓中に在りて嶄然頭角をあらはせり其天性學才あり故に學業の進歩實に驚く可きものありしなり明治二十年七月漢學科を卒業す是より先き赤太郎氏は京都中學を卒業して東京第一高等中學校に轉す絲子之と時々往來して互に稍樂しき境遇に立つを得たり其後絲子身體常ならす爲に學校を退きて東京に來り其良人と共に本郷西片町に僑居す數月を經て絲子分娩男子を擧げ命名恐と云ふ時に明治二十一年五月十二日なり分娩後幾何もなく不幸にして産褥熱を發し甚た惱む直に兩國矢の倉婦人科國手櫻井郁二郎氏病院に移し療養す赤太郎氏常に病蓐の傍にあり父母及び妹伊左子等交々來りて看護もつとめつとむ六月初旬病危篤に陷れり然れとも精神毫も錯亂する所なし赤太郎氏其終焉の近つきたるを察して其言はんと欲する所を問ふ此に於て絲子其父を呼びて身を重んじ強健を失はずして其の事業に從事し又教道を守りて永生の道に歩む可きを勸め次に良人に向ひて曰く吾身拙くして郎君を慰め扶くる能はざりしを恕し玉へ希くは吾が死後郎君が一旦立てたりし志を畢生貫き玉はん事をと終に光多を呼ひて生前の知遇を謝し身を謹みて道に役す可きを語れり其後病勢頗りに衰へ苦痛漸く減し去りて稍快復の望あらしめしも八月中旬に至り病勢また激し來り再び危篤となる二十日拂曉夫赤太郎氏獨り看護して枕邊にありしが絲子悲哀の情に堪へざりけん其疲せ衰へたる雙手を擧けて良人の頸を抱き暫時は離しも得やらざりし而して其祈禱を求む赤太郎氏爲めに祈れは絲子之に續て絶へ入らんとする聲を發して神よ今予か手を展けて切に祈る所を聞き玉へ予は過にし日曜を誹りし罪人なり願くは其罪を赦し玉へ予が心の汚れたる思を取り去り高尚なる品格を與へ玉へアヽ予が肉躰は疲れ果てゝ將に亡んとす予が咽は渇きて語る能はず予は生死を神の御手に委ぬ願くは予か此祈を救主の聖名によりて聞き上け玉へと祈り終りて疲勞最も甚たし廿一日の夕傍に在る者其子恐を擁して病床に近かしむ絲子指を以て之をあやしつゝ乍

紅涙眼中に充滿す既にしてアパアパと呼んで之に訣別を告く時眼力衰へて明に愛兒の顏を見ること能はず夜中苦痛また甚たし父は近て其語らんと欲する所を問ふ絲子曰く神は昨日迄予を此世に置き玉はんとしたれとも今日は予をして此世を去らしむるなりヮヽ神よ吾魂を受け玉へアーメンと祈る後久しく其指に着けたる金環を取て亦太郎氏に渡し曰く君に呈すと醫師に向て謝辭を述ふ亦太郎氏哥林多前書十五章の末段復活の主意を記せる所を讀む絲子其意義を了解せし旨を告く暫く熟眠し氣息漸く細り遂に全く絶す嗚呼實にこれ明治廿一年八月二十二日午前三時半なりき。

絲子病中の有様は精神確乎として動ずること無く始より生死を一に天父の御手に委ね其傍らに在る者に語るや毫も平生に異らず父其國に歸り居りし時櫻井氏絲子の病狀を書送れる者あり其書中に

右は目下危篤と申す次第には無之候へ共何分疲勞（尤も精神は例の如く確乎實に神の如くとも申すべし）甚敷に付一應御聞に達し候云々。

嗚呼絲子享年未た二十四歳に足らず將に咲き亂れて秋實に至らんとする春蕾の時に夭す豈惜まざる可んや其父の新たなる事業は未た緒に就かず其夫の遙遠なる學業は未だ漸く半に過きず生み出せる愛兒未だ其母を知らず而して其身の修學また未だ初程に過きずして逝く父母の悲嘆を云はんか余は云ふに忍ひさるなり其眞人の心情を想まんか余は摑み取る事能はさるなり且つ孤兒忍か一生慈母を尋ねて亦た之を得さるを思へば誰か爲に潸然たらざる者あらんや若し絲子にして天道の幽遠にして知る可らず人生の窮なくして頼む可らず一生一死皆な悉く天父の主宰し玉ふ所にして人たる者の分止に萬事を之に任せて只信仰の一生を送る可きものなるを悟らずんばその心を塵世に遺す勿らんと欲するも豈得可けんや絲子母として未た全く備はれりとせず妻として未た全く備はれりとせず又學生として未た全く備はれりとせず然れとも神を信し救主を信ずる宗教の念誠に厚く常に天に至るの備をなせり故に其就眠の際擧止從容綽然として大丈夫の如しアヽ此短き一生多くの觀る可き景色あり豈なんぞ短命これ必ずしも不幸なりと云を得んや余は絲子の一生を貴重す。

小説

○あるのん物語（其五）

わめりえ　らいずす著

美妙齋　たより　合譯

意外な人の出現にわせなすは阿とばかり思はず大地へ平伏しました。

が、私は中々決心しました。身を以て處女を掩ひながら矢庭に相手の口の端に拳をくらはせ、その帶でぐる〱卷に縛ッて地面へ倒しました。

それから私はわせあすを小脇に抱へ、そのまゝ庭を飛出して、あるくのある山まで行きました。で、舟へ乘込む時間は早わづかの間に迫りました。

乘り後れては一大事、一生懸命に馳ける內、見れば、空にどす黒い、恐ろしい雲が湧きました。その腹は黄色で、丁度大蛇の腹のやうで、そして其間からすさまじい電光がやゝ晃めきました。

そろ〱聞えはじめる雷の音、中天を羅綾の形に刻むやうな火の光り、もはや大地は震動して、そして私も響きに撲たれてほと〱斃れさうになりました。

わせなすは身の長の高い婦人、抱く私のその疲れ—馳け過る途にある木立はざわめいて吾儕をあざわらふやうでした。

見ればその白い顏は悲しみと恐れとにやつれて萎みかゝッた花と見紛ふばかり。で、あら、その内に、やがて、終に、成ました、一滴が、全世界の人間を洗ひつくさうといふ物の先觸れの一滴が、あせなすの額の上に。しかし、私はそれを嘗め盡くしました。

やがて山に來た頃になると、恐ろしい風が吹き立ちました。それに吹かれては雲も縱橫無盡に千切られて、而もそれながら猶ろの中にきらめきを見せて居る工合、比へれば黑の戶張に銀糸の縫が有るやうでした。そして風の吼える音のすさまじさ、遠目ながら海には言ひ盡くされぬ程に浪も荒れて居ました。

辛うじてあるくまで來ました。やゝ戶に手を掛ける途端わづかに戶を閉て切ッた潮合、はや洪水の堰は開きました、天の窓が開きました。

見れば私の眷屬はあるくの三階に居る樣子、直に私は半死半生のあせあすを抱いたまゝで極下の部屋まで行く、その處へ丁度戶を閉ぢに出て來たのは父親のあです。

稻光りが恐ろしさに父親は手をかざして屹とあるくから外を見わたして私の名を六度くりかへして呼びました。その間も雨風は烈しく攻擊して來ました、父親の白髮は浪を打ッて、そして上衣は羽翼のやうにひらくと飜ッて居ました。けれど言ふに言はれぬ程落ち付いた躰でした。が、顏には包み切れぬ苦痛が皺となつてあらはれて居ました、强い風に吹かれて湖水の面のやうに。で、くりかへしては私の名を呼んで居ました。

呼んでも更に答への無い、それで仕方なく諦らめたやうでした。雨は小川のやうに窓から降り込む、それを毎までも打棄てゝは置かれません。思ひ切ッて、閉ぢ切りました、思ひあきらめて。そればかり、くるしそうな叫び聲!やがて戶に鈎貫を掛けました。

掛け了ッてさも歎くといふ躰で上衣を頭へかぶり、梯子を傳はッて三階へと行きました。これは必竟私が歸りおくれてしまッたと考へたからでした。

父親の立ち去ッたのを見て私は上衣を脫いで床に廣げ、漏る雨の雫を掬んであせあすに與へると、やがて氣が付いて溜息一聲、辛く目を見開きました。

で、前にも言ッたとほり此處は獸類のあるところでした。烈しい外の響きに恐れては獅子も虎も一樣に叫び狂ふその凄

さ、中の物音も外の響きに負けません。

おせなすを抱き緊める私。ふるへるばかり。おせなす。

その耳に口を當てゝ私は言ひました「老父は私が死んだことゝ思ッて居るから是から行ッて無事な身を見せなくてはならない。で無いと飲食の物も貰へないから」、

「ぢや妾一人をこンな恐い處へ殘して御出でなさるのですか」。

「あゝ、しかし斯ういふ場合になれば人も獸も咸朋友になるものだ。さア、一途に御出で、獸類に頼まうから」。

手を取ッてわれ〳〵二人は獸類の中に入りました。

そして私は聲を張り揚げて獸類を制すと、いづれも畜狗のやうにやさしくわれ〳〵の方へこすりつきました。そしてその慄へて居る樣は寒さにひるむ小猫のやうでした。

「御覽、害は爲まい? だからすこし待ッて御出で」。

「はイ、そンなら御待ち申しましやう」。言ひながら氣もやゝ落ち付いたと見えて亂髮を揃へて居ると、猛獸どもはいづれも羊のやうになッておせなすに凭れかゝッて手を舐せられるのを喜んで居ました。

まだ窓から漏れる光りに薄暗いながら物は見えました。

駈け出して第三階を登ッてわたしの眷屬り集ッて居る處まで行きました。

て、眷屬は私を見るや否や、わッと駭いて髮を擾ひました、多分幽靈が來たのだと思ッて。

そして私はこしらへました、「御父さん、鷹は見付かりませんでした。急いでかるく〳〵駈け込む途端、二階から下へ落ちまして、こンなに着物も何も裂けてしまひました」。

この譯はいつか私が疵だらけになッて居たからです。

喜ぶ父親、私を胸に引き付けて——そして眷屬一同もわたしの周圍を取り卷いて揃ッて神に感謝しました。

て、今斯う父をいつはッて私の胸わるさ!

われながら罪を犯したと知りました。

けれどおせなすのためならば。

と考へれば罪を懺悔する處も無くなりました。

○酒鬼 (其五)

藤花主人

禍福は糾へる繩、人間は實に塞翁が馬。黒白も分かぬ暗の夜に道惡にすべッて裁縫をろしの着物を泥にすれば計らずも手に觸る縞の財布に五十兩、ヤレ〳〵嬉しひぞと買立の駒下駄を跡にキヤラコの足袋はだし、まづ身祝にと料理茶屋に飛込

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

めば御用ト背に手の廻る世の中。昨日は榮耀に四輪の車を走らせしも馬が暴れて壕の中へ投出され、是が原因で朝露夕電。今日は生々しき土饅頭を天王寺に見るとは敢果なき憂世―さても味氣なし。されば金持になればなるで又心配が絶へぬ、常日頃爪に火を燈さぬ計りに苦心して世間の義理を缺き人の噂も聞流して貯めた財寶も一炬に灰となる曉には昨宵の旦那様雀屋に奉公口を索す。金持の爲には是ほどに恐ろしき火事も此頃は施與金で樂になる貧乞人の喜びもありと聞く。

山澤作次は醉ても生醉の本性違わず、火事と聞て一目散に無我夢中に馳出したが二三丁も離れし廣地に來てホット息。初て我に返りて振向けば―コハ如何に―我家の方は炎々たる猛火。救助を求むる悲しき聲―竹木の爆る凄き音、天地は叫喚を以て充滿する修羅場。流石の作次もハット驚き、遽に醉も醒め、身躰もワナ〳〵震へ出せしが「ドケエ……間拔ッ」と火事裝束の威勢よき男に突飛されて群集の中へよろ〳〵。

醉た時こそ眼をすゑて太平樂を並べる剛らしい男なれど醒れば赤き顏が青くなつて嘆息をする正直者。母や女房の意見に居堪らず我子の孝行に恥入つて、直にも禁酒と誓文を書ぬ計りに詫入れど。是も何かの因緣であらふ酒屋の前を素通りの出來ぬ性分とは。一升樽に錠を卸した額を金比羅樣に納める途中で「エヽ儘よ是れッ切り……」と理窟をつけて纒簾くゞる事も度々。聞けば愛想の盡る話だか醬油樽に閻部七となつては近所の鼻抓なりと。お邸のお世話で先月から砲兵工廠の職工となつて僅かでも日給を賜はる身分となりしに、半月毎に請取る給料を歸りは居酒屋で茶々無茶苦茶。あらふ事かズボン高下駄の扮裝で綱曳車に大盡顏で歸る時もありと。それでも母や妻は案じらるゝと見へ、餅菓子羨占稲荷鮨のお土産、是が却て涙の種、母嫁の苦みは此世からの餓鬼道。今日は給料を請取る日なれど亡父の命日なればト呉々も母に言含められ、ソコは正直者、鼻に栓をして目隱をせぬ計りに傍目もふらず出掛しに。久保村と云ふ類は友の酒好に呼止られ、無理遣に伊勢文と云へる寄りつけの居酒屋に連れられ、ツイ一杯が二杯となり、いつか命日の事も何も彼も忘れはて今が今まで夢中。氣が附て見れば勿躰なや亡父の命日に此しだら。是れは兎もかくも慥に家は丸燒、燒る品物はないがお母さんは逃延び給ひしか女房は無事なるか、是ばかりが胸一杯。正直者の常としてサア斯ふなると働く方角もなく唯茫然たるばかり。群集に押され突飛され遠くなり近くなり、火事場から二三丁

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

の間を彼方此方まで〳〵、心は空蟬。

「山澤、どうした‥‥」肩を敲いたゝ前晩の久保村。

振向いたが眼を圓くせしのみ返事はなし。

「オイ燒けたノカ‥‥」　猿が餌を落した友を笑ふといふ口振。小鼻に皺を寄せて「シッカりしろエ、おれの宅へ來い」。

無言で承知をして諸共に水道橋を渡つて猿樂町の——是も裏家住居の久保村の家に來た。

「山澤、待ちチエ、獨身者は是で困らア。寒空を歸ッて來ても戶を明けて吳れるものも無エンだからナア、ダカラつい‥‥コイツどうした明かチエぞウン‥‥」

力らを入れて戶をガタ〳〵、やがてピシヤリッ「エ、危チエ‥‥オヤ〳〵ランプは消て仕舞つた、ダカラ獨身者は嫌エよ、待ちチエ山澤今ランプをつけるから‥‥」。

暫くは暗闇の穿鑿、按摩の川を渡ると云ふ身振で壁を傳ひ疊に還て三四分。「チヨッ‥‥」とヂレ込が二三度聞える中、漸く々に見附つたマッチをヂレッタさふに摺りつけてランプに移したれば薄暗ながら八疊の部屋手許は明るし。是も山澤が住居と甲乙の間柄、隅には葛籠と明荷を重ねて今旅から歸つたト云ふ景色である。

「オイ山澤、入らないか。ナニをぐづ〳〵して居るんだ」

沈默で氣のない顔附をして戶を閉めて上れば久保村はクスクス笑出したが無理に呑込んで

「意苦地が無へ野郎だ、燒ける物のねエ癖に。マアしつかりしろエ」

席を立つて臺所の戶棚を頻りに索して居たが頓て出して來たは貧乏德利と水呑コップ。

「サア一杯呑め、ナニ‥‥嫌だ。止せ——嫌だッてエ風でもねエぜ」

山澤は恨めしさうにコップをながめたりしが氣のない返事、

「マア今夜は止そうヨ、氣色が悪い‥‥」

「氣色が、ハ、、、大笑エダ。そんなに閉ぐなエ。本當に飲まチエ‥‥それジヤア見て居ろ、おれが飲んで見せる」

一息にグット水呑コップ一杯を飲んで胸を突出しながら

「ゲエー、好イ心持だ。山澤‥‥飲まチエか、上酒だぜ」

嬉しひにつけ悲しひにつけマア一杯と云ふは上戶の常。祝ふ時には百藥の長、悲しひ折には憂を拂ふ玉箒。理屈を無理につけても何かにかこつけて飲みたがる山澤作次。現在眼の前で人ちらしに命よりも好もしき酒を飲まれてはいかでか堪る

べき。鼻を搖かしても澁面作りて横を向き、飲み度もあり飲み度もなし歸りたし止まりたしと云ふ口振で、

「マア今日はお預にして歸らふヨ」

「ナアンダ止せ、きまりだぜ、飲まチエ口どころか鯨よろしくの癖に。サア一杯飲め、ひいき分に酌を好くするぜ」

サアと鼻の先に推附けられてはモウ堪らず、嫌々さふに一ト口二タ口、甘さふに舌打して

「好い酒だナア……」一分計り間を置いて「實はナア」

「ウン……どうした」返事はまじめ。

「實はナア」跡は口ごもる。「ウン……どうした」愈々まじめ。又改まつて「實はナア」。

「止せ、白痴が鸚鵡に弄かやアしめエし……」

「マア聞て呉れ」間の惡るさふナ言ひ方。我と勇氣をつけて

「マア斯ふだ、今日は死んだ親父の命日で決して酒を飲むなとおふくろに曰はれたんダ、所で今日役所の歸りに伊勢久で君と一所に……からモウ闘部録にあつて火事も無中で飛出したんだからおふくろも嚊アもどふなつたか更に知らずで……」澁る口を漸々に是れだけ。久保村は大口開て

「ハヽヽ、何の事たそれがどうした」

「どうしたッテ、どうも心配で……」恨めしさふな口振。

「止せ……泣出しさふな顏アして。おふくろダッテ嚊アだッテよひ〳〵ジヤアあるめエ、マアずん〳〵飲め、醉てる中が極樂ダ」

「家は燒けタらふナア」

「燒ける方が好いぜ、第一店賃の借が流れるし、借金取が來ねエ樣に隨徳寺が極められるし。ウ、……まだ好い事がある、此頃はお惠み金が出るぜ」

「お惠み金……」しかめた顏で殘りの酒をグツト息をもつかずに、「好い酒だ、モウ一杯酌で呉れ」

「それ見ろ、跡引き蛙の癖に。貴樣なんザア火事があると豐年だ、お惠み金で一杯呑めるぜ。ナア前祝エに驕れ」

暫しは獻酬。壁越しに聞ても面背くる猥雜の評判を手柄さふに語る笑聲。糞臭の中では柴船も薰らぬ、まして抹香では見へるは唯烟ばかり。昔しは若樣と呼ばれた山澤作次も顏色が以前の赤味に返ると母親も女房も忘れて仕舞ひ、氣樂さふに口から出るは太平樂。是が酒の功德と申すてや。

ヤブにらみの人がお辭義すれば二人が挨拶すべし、
人ごみの集會などでは至て都合よしさぞ。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

開書

O. S. C. 君に答ふ（二）

佐々城豐壽

一貴君よ吾儕は止を得ずして當日の一斑を述べん吾儕も最初より一切義務的にて舉け行はんと欲し手を分ち百方に奔走し又種々に苦心せり然れとも不幸にも又吾儕の不敏にも支出せずしては收納の得る能はざるを覺れり故に音樂會に緣ある人に謝禮し又會場入費等より諸事合計すれば參百五拾圓餘の失費はどふしても免れざるを知りたり故に省略の上にも省略を加へせめては半額位は止を得ざる時は負擔の心組にて着手せしもの也

一此半額負擔の事も實際その當時吾儕の身上より考ふれば實に非常の痛心にして之に加へて意外なる障害の湧出ると多端にして失費負擔の外に落膽せしと極めて少なからず益々奮勵して孝案從事せしものゝ此會の爲めに痛心せし事は吾儕一世の間に一回とあるも二回と無き事なるべく心配せり頭上の綠髮も俄かに白髮を加ふる多しと家內の者も申したり此時に在りては最早入費の損失は頓着する所に非ずして唯々此障害に打勝ちて是非とも音樂會を舉げざれば能はざる勢ひと成れり貴君の訓戒さるゝ事あらざるも吾儕の不能吾儕の無智なる事は此時充分に覺りたり

一地位の高下と德望の厚薄に由て事業に難易のあるの外尙又た寒風雨雪の連日に續き道路泥濘なる事、勞動者固とに僅微なる事、一切の買入盡く現金の事、會場入費より會場內の人夫も賃金ならでは能はさる事廣告料の件其他一より十迄吾儕の感化力足らずして盡く寄附金に成せる能はざる事等は攻擊の衝に當りて辭する能はさるとも也

一最も肝要に貴君の誤解を辨明せねば成らざるは寄附金と稱ふる金の性質なり表面の文字より見しならば寄附金に相違なきも是は一切實券料也眞に實券料に非ずして單純に音樂會の不足を補はんとて寄贈せられたるは百中の一に登らざる細小の金なり某々二三の人に限れるなり他は皆實券料也但し其淑女紳士の高義に對して其芳名を保存し置きたき心よりして姓名の知り得る丈けは寄附と爲して記帳せしもの也

一然れば僅かに百圓位に大騷を成せしと云はるゝも此百圓の寄贈なりとて此會を舉けたればこそ此會より此百圓も贈られたるものと考ふ此會を成さゝれは此百圓は贈られざるもの也況んや各個の分としては同志社へは淺金の疾くに濟みたる人も更に此會の爲にとて贈られたる人もありしかたく以て考ふれば吾儕は寄附者より不滿足と思はるゝ事は毫も有らさるとと感覺せり貴君よ寄附金の性質は前の如く一切實券料なる事を了知せられ此會を舉けざれは此金の集まらざる事も御承知あれは幸甚なり

一單純に同志社に寄附せんとする人は固より種々新聞又は雜誌等各社の便利あり何ぞ我か音樂會に向つて贈らるゝの勞を取らんや已に同志社へ贈金は濟みたりと申されたる人も更に入場せし人もあり

一最後に吾儕の思想の在る所を告けさるも高意に背くに似たれは一言摘まんで申さん吾儕の意想は單に此寄附金に止まらざる也唯此寄附金に止まらば一錢でも二錢でも多きを要せば學校建築の唱歌の印刷を始として省く可きもの頗る多し然とも吾儕の志想は此金員の外に同志社に對して別に贈るへき微意の在りしを推察し給はらば幸甚の至りに堪えず余は玆に申さず思想高遠の紳士淑女の知る所ならん

併しながら大騷きをなして贈金の少なきとの小言に至りては吾儕の敬んで肝銘して服膺致す處に候

O.S.C.君は匿名の方なれは是非もなし御姓名宿所判然なる御方に當日の實況を一々記事を貴覽に入れて御話しも申し又高論をも伺申度候此事に關して御敎諭下され候御方は郵便を煩らし度候

一小妹の生來無智なる特り經濟上の無智なるのみに限らず百事世の交際に逢ひし事頗る多し今又殿中にある者もあり序手なれば愛姉方に申演へ置きて殷の鑑と成る事あらば幸ひなり小妹の尤も無智なる百中の一二を左に

一今を去る數年前より小妹は世人の娼妓を賤視せずして尋常一般良家の婦女と娼妓との間に區別を置かずして婦人は一般婦人なりとの誤解を破らんと勸めたり事物に觸れ屢々論難せしも却つて世の嘲笑を溪り或は之か爲に困難を來たせし事も多し當時此の如く輿論の許さゝる所と抗抵せしは此其小妹無智の第一也

一婦人矯風會の起るに及んでや愛姉と共に奔走して有名なる男子諸君に請求して禁酒の目的と娼妓全廢の演說を成さん事を百方手を盡し依賴せしも一も演說の此目的に及ふものなかりき演者は何つも婦人の好む所は燒芋にあらずやなどゝの諧謔に過きず井深君の演說中五六語憾婁の正道に非ざる罪を鳴らされたるは當時實に耳あたらしく感ぜられたり津田君の演說にて始て禁酒の必要は世上の耳目に入るを得たり同氏の演說は空前絕後なれとも實に此以前は禁酒の說は會員の聽從するのみにて有害の物たるを判然せざりき是より先き演說としては娼妓の賤しむへき醜業たるを演べたる男子一人も無く剩つさへ某牧師ですら娼妓は世に害なしと迄も公言せられたりき當時小妹等の狹き苦心今は已に失望して男子の學者は信ずるに足らざるたのむに足らず每會演說には婦人の短所を公言して大目的なる禁酒廢妓に及ばねば有害無益の男子の演說を（今日の男子は然らず）聞かんより婦人自から演壇に登りて廢妓論を演するに至れり娼妓全廢論の婦人の唇より出ると婦人か男子衆人の前に立て演說するとは未曾有の出來事なれば觀る人聞く人之か攻擊を爲さゝるは無し小妹は此批難中の最燒點に居りし者なれば此其小妹無智の第二也

一賤民子女の一家を養なふ技術なく醜業に陷ちいるを傷たみ早やく糊口の術を教へ醜業の耻つへきを知らさしめんか爲めに內外高義の女敎員に謀り職業所を設けんと試み去年三月中三夜幻燈會を開き些少の資金を基礎として職業學校を創立せり敎員諸君の熱心に由て殆んと半年餘を支へたりしも諸種の障妨ありて廢止する

に至れり今尙遺憾に堪へざるなり是りの小妹無智の第三也
一今又慈善音樂會を開けて一切婦人僅かの手に成りて百餘日を費やし僅かに壹百餘圓の金を寄附したるは是その小妹無智の第四也
一大方の姉妹よ小妹か無智なる數へて盡きず唯此般の批難に由て益々小妹前途に謙愼を加ふべきを覺悟せり然しなから姉妹に願ふ姉妹は誤解して一事を成せはこそ彼是も言はれ一言を吐けばこそ世よりも嘲けらるゝと判斷して引込み思案に陷る勿れ、看よ姉妹よ今日婦人の品位は如何なる沈降ぞ婦人の世人に目せらるゝ如何なる高低ぞ、婦人沈默して東洋の文明進捗すべきや、一國の元氣は公衆清潔の品位に在るに非ずや、婦人沈默して公衆の品行高度に昇進せは婦人宜しく沈默すべし、婦人の男子を補翼し內庭を掃除するに非されば他日內地雜居の曉にはトルコ埃及の荒凉觀るあらんか震慄に堪へざる所なり
一伴君の經濟を以て任ぜらるゝ頗る深し小妹等の事にも注意せられたるは全く君が一世の眼光氣力此一點に注き其任する所に厚きは深く謝する所なり併せて今後も及はざる所を忠告せられん事を乞ふ

時事

（本號余白に乏しく不得止六號字に改む讀者諒焉）

○婦人矯風會々頭

同會頭矢島楫夫人は曩に誤まつて車より落ち、痛たく頭腦を打たれしかば、以來身狀元の如くならず會務の激職に堪ゆる能はずさて、再三其任を辭退せられぬ、故に議員會に於ては止を得ず會議して一應其申出を受たりと云へども、尙ほ暫らく其の快治を待つべしとて別に改撰の趣きもあらざりき。近比に至り同夫人の痛所Я去りたりと聞き議員達は再たび其の復職あらんとを强て委托したりと云へども、同夫人は其の會務を重視するの故によりて之を諾せられざりき、故に不得止副會頭を撰舉して暫らく會頭を欠き、本年十月の總會に於て別に議する所ろあるべしと承はる。矯風會創立以來矢島夫人の盡力一と方ならず、吾人は公けに私しに其情實を知悉して深く同夫人に謝意を表するの念に切なりしが、今ま其の病の故によりて忽焉此の寬容宏才の良會頭を失ふは極憾の事と云ふへし、故に吾人は尙ほ其病の全治せんとを祈るの外余念あるなし。

○女學雜誌は改良せす

貴女之友第五十六號は、「女學雜誌の改良」と題して左の如くに云はれたり、

我が「貴女の友」の姉たり妹たる十有餘種の雜誌の中、其の世に出づる最も早く、從つて號を重ねる最も多く、經驗も積み、準備も整ひ、今や卓然として畏敬の燒點に立てるものは其れ「女學雜誌」なる歟。同雜誌の改良進步たる、今に始めぬことながら殊に今回（五月四日第百六十號）の改良は其の最も著明なるものとす。同雜誌は實に豫告の如く、新たに其の論說記事を政理的、社會的、外交的とし、更に多く文學的、攻擊的、結構的、主張的、新鮮的たらしめたり、今後も尙ほ永く是等云々的たるに差はざるならん。同誌は、其の面目こそ數々變遷したれ、其の精神に至りては明かに千載不磨の蹟を留めたり。淡々たる思想、滔々たる文章、威ありて猛からず、優にして柔ならず、千言萬語甚だ長しと雖ども、看るもの其の長きを覺えざるなり。世の此の雜誌に反對するもの、或は同記者を以て頑癖ありとなし、或は其の行文を以て奇怪なりとなせども、是等は固より察せざるの言のみ。吾儕も亦敢て悉く女學雜誌記者に感服するものにはあらずと雖ども、其の鬱勃たる德容の勇氣に至りては、豈稱讚せざるを得んや。

吾人は此言を謝すると共に又些さか不平なき能わず、何んとなれば女學雜誌は發行以來未だ嘗て一と度びも改良を宣言したるとあらず、亦未だ嘗て一と度びも改良したりと思ふとあらざれば也。抑りも改良とは惡しきを良きに改むるの謂にあらずや、吾人不肖と云へども未だ嘗て惡しきものを日本の社會に呈したるとあらず、事情の許す限り、力の能ふ限り、出來る丈け夫れ丈けの多ほくは常に全力を盡せり、故に假令ひ讀者は之を見て不十分なりさすとも吾人は之を十分なりと思へば也、何の日か改良を宣言せんや。記者もし女學雜誌初號以來未だ一回だも本誌に向つて改良の二文字を用したるとあらざるを見、以て吾人が微衷を察すれば幸はい也。

○高等女學校撰む所ろの婿

國の基第三號は能勢榮君の「教育ある女子にして安全なる夫婦併立の生活を遂げんとするには何如なる男子に嫁すべきか」と題する一文章を載せたり、能勢君の判定する所ろに依れば、凡そ優良なる教育を受けたる女學生の婿たるもの、別言せば當時高等教育を受けたる女子一般の志望即はち理想上の夫たるべきものは、

第一　學者たらざる可らず、
第二　洋行留學せし人ならざる可らず、
第三　性質活潑有爲にして品行方正に、
第四　多少財產ありて日常の生活に窮せず、
第五　文筆の才能ありて著述が出來、
第六　一個の見識ありて之を口にも表出し之を筆にも記述し多少其名を世間に知らるゝの人たらざる可らず。

候補者の資格如此し、擇ばるゝと容易にあらず、少年子シッカリすべし。

○法師婚禮の仲人たり

聞く、在尾州名古屋の田島象二氏（任天居士）は、今度岐阜縣士岐郡妻木村熊谷彌吉氏の長女そめ子を娶り、去る三月二十三日に、臨濟宗に有名なる長山虎巖師を導師となし、佛式を以て婚禮式を行ひ、儀式文といふを讀まれたるよし、歐米諸國の婚姻には必らず宣教師が立合其式を行ふことなれど、佛教式を以て之を行ない

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

たるは、田島任天居士を以て嚆矢となすなり。任天居士とは此頃ろ佛教滅亡論の著ありし人ならん、居士が大厦を既に倒れたるに救はんとする、其忠實感ずべし。

○佛海益す賑やかなり

前年田中智學氏佛教夫婦論を著し、坊主は以後死人を取扱はずして生物を介抱せよとありし、吾人も贊成しつゝ一笑したるが、此度果して佛教式の婚姻を見たり。曩に大同團と云へるもの設けられしが、其の運動は兎に角に彌々目立ち來れり。特に近來僧侶が衆議員被撰擧權を奪はるゝの理由を政府に上開するもの頻々として萌出で來れり。如此き事件、其當否に付ては吾人もとより說あり、然れ共先づ之を佛教より取りての利害如何んと問ふ者あらば、吾人は直ちに其不利なるとを忠告すべし。詮し之れ佛者の還俗なり、還俗以后豈に有難がらるゝの佛僧あらんや。

○高僧の醜姿

時事新報五月十一日紙上福澤氏の法事餘話を載す、中に云く、
醫師の言を聞くに府下の某寺院に於て少壯の清僧を教ゆる所ろありて往々患者を診察するに梅毒症の割合は尋常の世俗よりも多くして其清僧等は却つて毫も愧る色なしと云ふ啻に壯年生のみならず上流高僧の高き部分にも一婦不足を告げて尙ほ他に求むるが如き汚聞なきにあらず沙汰の限りにあらずや。

眞宗の雜誌「眞誌」之を評して曰く、
右の一話の如きは決して無理なる□論にあらず殊に一夫多妻云々は既に輿論の許さゞる所ろとなれば近來婦人矯風會が其筋へ建白せんとて其主意書様なるものを頒付したるを見たり我黨僧侶たるもの豈に猛省せざる可けんや。か遙に申す高僧諸君、醜姿の不德は決して輿論によりて初めて承知すべき事にあらざるに非ずや。

○泉源既ニ濁る焉ぞ下流の清きを望まん

加藤弘之氏は東京府敎育會の席上に於て如此く慨歎し、太たく敎育者の道德の爲に演述せらるゝ所ろありき、抑そも將來の日本の一盛一衰は殆全く年少子の氣力德質の如何に關す、而して年少子の氣力德質は殆全く之が敎育者の智德意何如に關す、今の如く不德なる泉源混々たるとき焉んぞ下流に於て淸きを望む可けんや。

○新平民

中江篤介君は大坂の新平民諸氏を衆議院に代表せんとし、此頃ろ東京市會議員の撰擧には石垣文七氏湯島區に於て當撰したりと云へり、蓋し日本に於て新平民たるべきもの二つ、一を昔しの穢多となし、二を從來の三界家なきものとす、今や平民主義いよ〳〵行れて穢多諸君も益す世に現はるゝなり、吾人は女性に代りて同情を表し、切に此等の同因緣兄弟に賀す。

○自然崇拜者の答　　しのぶ

甲　自然界を見て「眞」を求るものも亦た是れ智火にて物を突き壓を去り以て理を得るものと稱すべきや、若し之と同じき語法にてならば自然の美には靡を含むとも言ひ得べし。吾人は云ふ自然美の靡は靡にあらず其の被衣なり。

乙　不幸にして古今の哲學者に凌駕するを得ず古人既に其說多し一例を舉れば余が愛信するエメルソン美是れ最后の者にあらざるの論結に云く「Truth and goodness and beauty are but different faces of the same all. ○三即一の說は哲理上の熟語か、然らば獨逸哲學者最高の人の議論は熟語たる也。

丙　何人も近時の文學用字上、製作 (Schaffen＝Create) と製造 (Fabricirung＝Manufacture) とを同一にするものはあらじ。

丁　幾分か然り、或る意味に於て然り。以上謹答。

○女性の市長、市參事員

米國カンサス州中 Oskaloosa, Cottonwood Falls, Baldwin City, Hiawatha, Rossville の五市には去年來一切女性を以て市長市參事員と爲したり、然るに其成績甚はだ著じるしかりしかば當春去月の撰擧に於ても同樣に再撰擧せられたり、特に尤も喜こぶべきは之を撰擧したる女性は毫も黨派心に僻することなく共和合衆兩黨の候補者を夫に關はらず撰みたりと云ふ。

片々

○吳くみ夫人　前號時事欄に記したる番町教會の長老に推撰せられし吳夫人の事に付問合せ來るもの多し、同夫人は箕作麟祥同住吉爾池大麓等諸氏の從妹にして吳文聰氏の妹に當り、現に明治女學校の取締となり居らるゝ方なり。又幹事となりし高原みね夫人は嘗て本誌上にも掲載したる人にして今ま番町○○學校の校長たり。

○橫濱フェリス女學校　去一日新築校舍の開校式あり、幹事古莊氏、教員惣代中島俊子、同島田かし子、校長ブース氏等の演說あり、別に生徒の演說討論唱歌奏樂等を加へ來客三百人、午餐の席沖知事は日本人を代表するとして總領事グレートハウス氏は米人を代表するとしてバラ氏は傳道師を代表するとして夫々祝辭ありき。

○日の丸　兼て評判ありし日の丸第一號發兌せらる是れ曉天の初光なり願はくは彌よ明を增して酒鬼を追拂ふ中午の速かに到來せんとを。

○大山伯爵夫人　去五日同夫人方に三條公夫人西鄕伯夫人其他十數名の貴婦人參會あり席上カックス夫人が基督教の講話を爲されたる由。

外報

○英國婦人酒禁會　英國に婦人禁酒協會（B. W. T. Association.）と云へるあり一千八百七十六年に結成したるものにて英國中の諸婦人禁酒會が同盟したるもの也故に現今は其内に四百の婦人禁酒會を含み會員合計三萬人あり、去三月末其の大會を倫敦に開きたり。

○婦人の被撰權　英國控訴院判事一同の議決に依り婦人サンドハースト君は婦人たるの故を以て縣會の議員たると能はざるとゝなれり。

●女學雜誌殘本大安賣

是迄本誌一號より百號に至る百冊を金壹圓に低減し賣却致し來候處追々欠號を生じ既に百冊の内四十餘冊の欠本と相成候に付き更に**殘本五拾冊餘を金三拾錢**賣價を減じにて賣拂ひ可申候

但し府外は通運先拂へにて御届け可申上候

●通信女學講義錄　殘本安賣

通信女學講義錄は一冊大抵六七十枚づゝあり母親又は妻君が家に在りて女學の一と通りを學ぶの工夫あれば二三年の後は和學、理學地理、歷史、及び子育法、女子生理、家内理學、經濟學などの一斑を居ながら學び得べき方法なり一冊代價二拾錢の處大勉強一冊拾錢郵送料二錢に其定價を減じ**即ち十五冊**自一巻至十五**代金壹圓五拾錢郵送料三拾錢**にて賣拂い申すべし

女學雜誌社

福岡尋常中學校　**河野於菟麿**

右は雜誌御注文致され候に付き本年四月迄郵送致し來り候處同月下旬に代金御催促に及びしに福岡尋常中學校には該名の者無之旨にて四月第四土曜后の雜誌返却せられたり若し同人所在御承知の方は郵便税先拂にて御通知被下候へゞありがたく存じ候也

明治二十二年六月　**女學雜誌社會計掛**

●結婚媒妁所

日本橋區檜物町一番地全國何人に限らず嫁聟養子貰子等媒妁御依賴に應ず御來談被下候へゞ規則書差上候也

同志社大學義捐金の第二回募集取扱廣告

同志社大學義捐金

取扱期限は四月限り[illegible]地方有志者にして當[illegible]集中のものも有之趣に付き更に五月より十一月まで第[illegible]集取扱期限とし引續き取扱候間右大學設立贊成の諸君[illegible]に拘はらず金圓相添へ左の各社へ御申込被下度候

一金圓御寄贈の向は之を各社の紙上に其金高並に姓名を掲載し別に受領證を差出さず

一義捐は拾錢以上に限る

一第二回期限は本年十一月卅日を以て締切とす

報知社
毎日新聞社
朝野新聞社
東京公論社
東京新報社
改進新聞社
東京朝日新聞社
江戸新聞社
嚶鳴雜誌社
警醒雜誌社
經濟雜誌社
女學雜誌社
民友社
大坂朝日新聞社
大坂毎日新聞社
東雲新聞社
大坂公論社
京都中外電報社
日出新聞社
京都日報社
神戸又新日報社

●基督教新聞第三百五號目次

社説　默示の進化
敎法　一致敎會大會●組合敎會總會●其他要報
説敎　基督の愛に因り働くべし(三浦徹)
論説　東京傳道論(加藤覺)
雜錄　キリストの顯現●青年を要す●靴磨の小僧●伊太利の王○歌數首
小供のため　森の響
寄書　軍人と聖書(山室軍兵)●雜報及び廣告

東京京橋區加賀町十一番地　**警醒社**

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

交詢案内（甲）

（催促する勿れ 郵券十錢送れ 委細に申來れ）

● 雇ひたき方

十二 下婢 年齢廿歳より五十歳迄の基督信者を雇入度者あり

十五 召使 家内の手助けとなり小兒の世話をなすべき年少女子を雇ひたし尤も讀書算筆を學びたき志あるものを望む

十六 召使 重に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御内なり

十七 下婢 二十歳前後の薪水の勞を取る下婢を雇ひたし商家にて家族五人仕事はひまなり月給は一圓以上

十八 下婢 年齢廿四五歳にて裁縫讀書數學習字等を閑暇の節は教授致すに付き無給にて雇ひ入れたし但し基督信徒ならば教會に行くも家内同様にすべし

二〇 取締 基督教信徒にて年齢三十才四十才なる獨身の婦人にして女學校或は寄宿し寄宿生徒の世話を爲し得る者を備入れ度處あり但し算筆並に日本裁縫に心得ある者

● 雇はれたき方（乙）

六 奉公 地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇へれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

七 裁縫 年齢廿三にして家内の手助けとならんが爲め内職に裁縫に雇はれ度き者あり華族様か町家ならば大家のかたき内にて築地邊ならば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

十三 教師 栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御内にても教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河台邊を望む

一九 召使 裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居様の者に雇はれたし

二〇 裁縫 年齢十四五才にて華族様か或官員方の御方之内或は小間使に雇はれたし最も餘暇に讀書授けくだされば給料は不申受

二四 奉公 年齢廿二才にして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族様か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし

二五 裁縫 裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御内に教師に雇はれたし

二八 奉公 普通小學科卒業の者にて（年齢二十二才）産婆業を営まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に産婆術を學び度ものあり

二九 奉公 年齢十四歳にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き毎日四五時間英語學の修業致したし

三〇 通辨 年齢廿四歳にて貴婦人方の英語の通辨として雇はれ度ものあり

發兌

六月。一日 八日 十五日 廿二日 廿九日

七月。六日 十三日 二十日 廿七日

八月。三日 十日 十七日 廿四日 卅一日

九月。七日 十四日 廿一日 廿八日

定價

一册。六錢 郵税。一錢（但府内無郵税）

十册。五十八錢郵税。十錢（同前）

半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓六十九錢

一年分 二圓六十錢 府外は 三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を募する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行一回（廿七字詰）前金拾錢

同三回以上 一割引

同六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。

但し不道徳なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物は社議の上無代價にて引受く女學に關係ある書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町㽞々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年六月六日印刷
明治二十二年六月八日出版

東京京橋區日吉町八番地
發行所 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐